北京觀音

四川省圖書館藏

特20
596

之書記

田村松魚著

北米世俗觀

博文館新刊

東京市本所三丁目
博文館出版部

北米世俗觀目次

目次

風俗管見……一
ハンカチーフ……一
サスペンダー……四
靴……五
外套……六
煙草……七
數の讀み方……九
指拔……九

手と足……一〇
眉……一〇
頭髮……一一
將……一一
握手……一二
男は力を要する……一二
接吻を投する。秋波……一三
泣き方……一五
走り方……一六
ステッキ……一七

襟飾……一八
食べ物……一八
女の口將……一九
バックビン……二〇
帽子……二〇
襟と靴の踵……二一
外套の裏……二二
花の趣味……二三
蝉、蟬、蜻蛉……二八
米國に住める各國人種の性格……三二

米國人の黑人種逆殺リンチ法……四三
「アンクル、トムス、ギャビン」の作家……四九
憐むべきインデアンと「ラモナ」の作家……五七
米國人の喧嘩振　日本刀の威嚴……六二
日本人の喧嘩振に惚れた米國婦人……七四
米國の好男子……七九
滑稽に感した米國人の談話……八二
「助平」と云ふ字義の解釋……八四
米國人と火事……八六
米國人の飲料に對する嗜好……八八

米國婦人の內部に於ける權力……九六
天幕生活……一〇四
危險は豫想を外れる……一〇四
金錢の掛らぬキャンピング生活……一〇七
天幕敷地の撰定……一一〇
天幕張りの仕度……一一五
輕便なる我等の新家庭……一一七
夜の天幕……一二〇
想像では分らぬ……一二四

雨中の天幕生活……一二六
土砂降りの河畔……一三三
獨木舟で急流を遡る……一三四
闇中燈火を失ふ……一四四
唯一生懸命……一四六
無慘なる親友の最後……一四九
簡單なる家庭……一五二
（一）……一五二
（二）……一五九

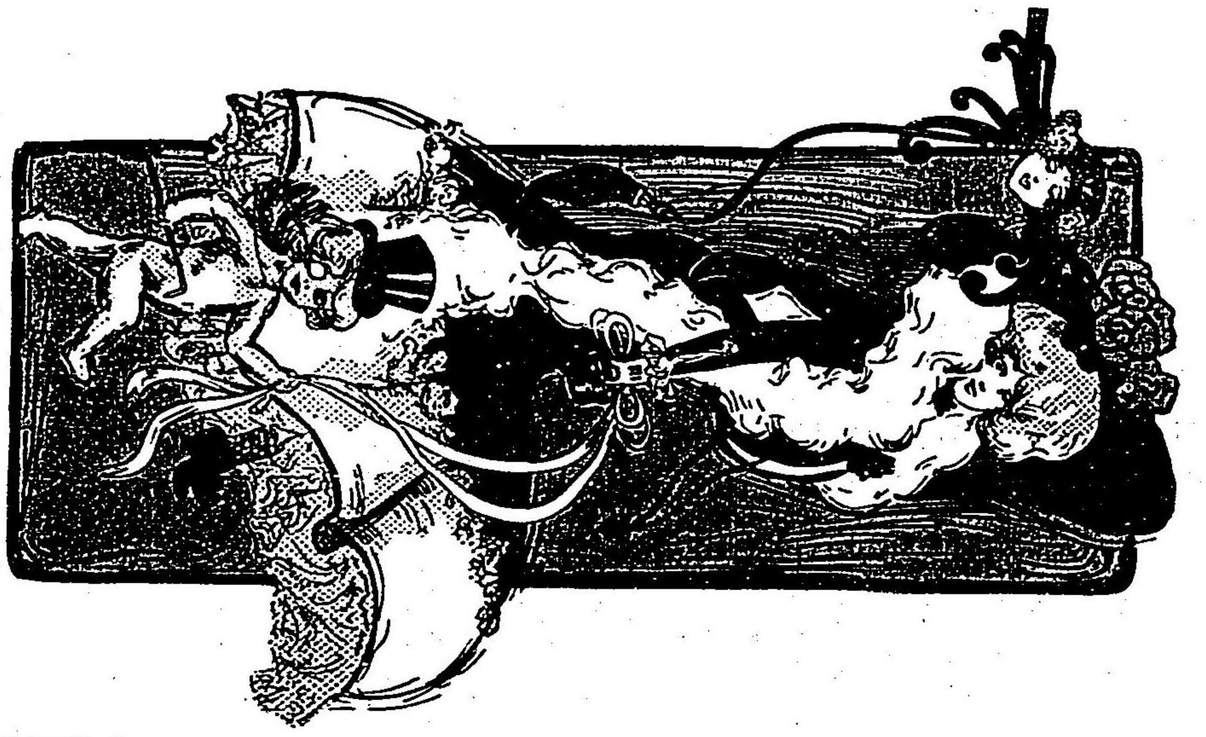
（三）……一六三
（四）……一六五
（五）……一七一
（六）……一七五
桃の實……一七九
（一）……一七九
（二）……一八〇
（三）……一八二
（四）……一八四

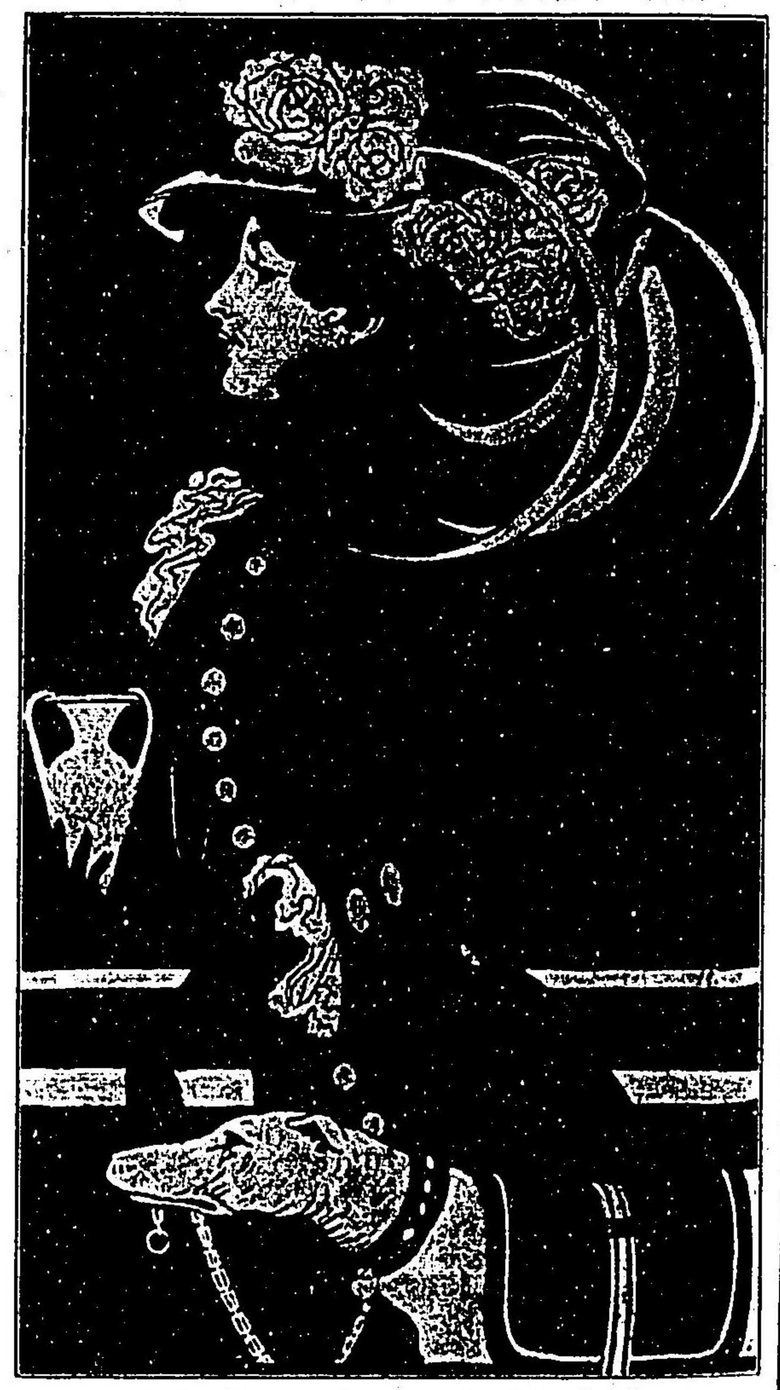
(五) ……一八八
(六) ……一八九
在米國同胞の勞働生活 ……一九四
在米の日本青年 ……二〇五
渡米當初の一年間 ……二〇七
リツトル、ブラウン、メン ……二一五
勞働青年の稼き振 ……二一九
家庭勞働の種類 ……二二四
苦心慘澹の境涯 ……二二八

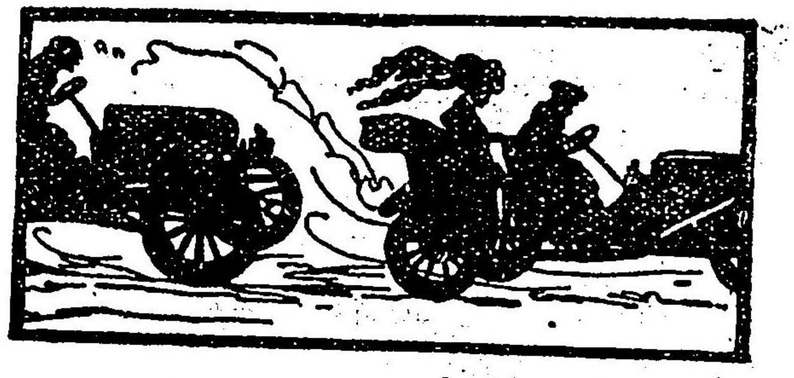
目次

在留青年の地方色 ……二三二
筆の人から觀た實業團の渡米 ……二四三

終







北米世俗觀

風俗管見

田村松魚

◎米國人は涕をかむのに片手でかむ。左の手でハンカチーフを持ち母指と他の四指とで高い鼻を兩方から抑へて、クスン、ク

△ハンカチーフ

スシと續け樣に小さな、急がしさうな音をさせてかむ。女ならばハンカチーフを胸のふくらみの所か、袖の間かへ小さくして押し込む、男ならば上衣の胸のポケットか、ズボンのバックポケットに入れる。兩手で日本人のやうに大きな長い辯をさせてかんで、多量の涕汁を出さぬ。

ハンカチーフは男でも女でも中流以上はリネンに限る。絹物は卑しくて安價である。シルクを用ゆるは賣女などに限る。色の這入つた刺繍などのハンカチーフを用ひてゐる婦人を普通の家庭に見たことがない。リネンは高價で高尚でシルクの及ぶ所でない。ザラならば木綿の白いのが好い。色の這入つたのは卑しい。

併し田舍の百姓或は鐵夫、牧童などは赤や青や紫などの地に霰小紋の型

の、廣いハンカチーフを首へ卷いて端を結んで結目をぶらりと下に垂れてゐたり、バックポケットから五寸程端を出して犬の尻尾のやうにしてる。此れが此の社會では一寸と意氣なのだ。或程馴れて見ると、何處か配合が好いやうに思ふ。丁度江戸ッ兒が豆絞りの手拭を肩に掛けたり、鷲掴みにしたりしてると同趣味だ。紳士が上衣の胸のポケットから白いリネンのハンカチーフの端を一寸出してるのが能くある。歐洲では此れには或る意味があるとか聞いたが、米國では別に意味はない。

日曜などにサンデースーツを着た店員などが能く此の風をしてる。餘り好いものではない。

△サスペンダー

◎米國人は夏になると、事務を執つてゐる間は大概コートを脱いでゐる。夏は白或は白のカスリのウエストを着るが、ツエスト無しでホワイトシャツ或はソフトシャツ（又ゴーフシャツといふ。此のソフトなシャツはゴーフを遊ぶ時に主に着けるから起つた名である。無論略式のものだ）丈のものもある。ウエスト無しならば、袴吊を掛けてゐては禮を欠くから、ズボン吊無しで皮製の帶を締めてゐる。夏服のズボンには必ず此の帶を通すべく特別に仕立てられてある紳士の用ゆるサスペンダーは大概フレンチスタイルのものだ。巾の狹い、全體が同じ白い布片で出來たものを用ひ、ズボンに引つ掛ける所に皮を用ひてな

く、また金具も極く目立たぬプレーンなものを用ゐる。布片には多く護謨が這入つてゐないから、伸縮が少ない。伸縮の多いは勞働者が用ゆるに都合が好い。

△靴

◎外國人は服を着けるのが極めて迅速である。下シャツを着、下ズボンを穿くと、直ぐ其次が靴を穿く。それからホワイトシャツ、カラー、チクタイと云ふ順序だ。日本人はズボンを穿いて後に靴を穿く。靴が一番後である。だが外遊すると勢靴を先に穿かねばならぬことになる。靴無しでは何をするわけにも行かぬ。靴下丈けでゐると云ふことは非常な禮に欠けたことである。編上げの靴の紐を日本人はボタンを締めて後に殘つた部分をぐるりと回して、

そして締めて置く。米國人はボタンを締めて殘つた部分は其の儘回らさずに房りと前で結んだ丈けにして置く。だから結目がボタンの上へ垂れてぶら〳〵して見える、一寸と見ると解け掛つてるのぢやないかと思はれる。

△外套

◎米國では外套を着る時、朋友同志ならば必ず互に着せてやる。(倶樂部或は家庭等にはそれ〴〵此等の役をするボーイがゐるが、其樣なもの丶居ない場合)そして下から手を入れて、上衣の裾をトン、〳〵、と引いてやる。一寸と我々が他から見て居て友情があつて好いものだと思ふ。

△煙草

◎米國人は葉卷或は紙卷に火を點ける時、他の人がマッチを摩つて呉れると、直ぐ口に啣へた儘で火を點ける。そして「サン、キユー」と云ふ。日本人は他が火を點じて出したマッチを自分の手に是非受取り、「有難う」と一寸と頭を下げ、そして自分で煙草へ火を點ける。

外國に長く居た日本人は必ず煙草を啣へた儘顏を前へ出して來る。馴れないと何となく横柄な樣な氣のするものだ。

米國の或るステートへ行くと、紙卷煙草は其州の法律として禁制である。紙卷は衞生に害があるのださうだ。併し倶樂部などでは公然の秘密に矢張り紙卷を

喫んでゐる。

此の法律を心得ずにインデアナ州の停車場で紙卷を喫へて居た自分は巡査に大目玉を食つた。

米國人のすることで、一番不潔で氣になるのは、チユーイングタバコを用ゆることだ。ポケットから嚙煙草を出し、それを指の先で割つて口へ入れて嚙み、そして黄黑い唾液を何處でもチユッと音をさせて吐いてる。隨分氣味が惡い。汽車のスモーキングルームへ行くと、唾液だらけでそれは不潔だ。唾液吐きを出してあつても、何處でもやつてる。米國人も決して行儀の好い國民ではない凡そキザなものは米國人の唾液の吐き方だ。前齒の間から、舌で押すやうにして、チユッと云つて飛ばすのが隨分巧みだ。日本人でも能く斯うやつてる。馬

鹿氣てゐて其樣な眞似は僕等には出來ない。

△數の讀み方

◎日本人は數を指で數へるに、一、二、三、と片手の母指から順に折り屈めて行く。米國人は左の手を擴げて出し、右の指で左の手の小指の方からワン、ツー、スリー、と一つ、〳〵に觸れて讀んで來て、そして母指で終ると食指から順に小指へ行く。日本人の『指を屈して回顧すれば』といふのを英譯して、何の事だと云つたといふ話があるが、ありさうな事だ。

△指拔

◎日本人は裁縫をするに指抜を右の中指の中央の節の上部に差す。米國人は上部の節の上、即ち爪の所にさす、針の孔は日本のは丸い。米國のは長い。鼻の孔と丁度能く似てゐる。

△手と足

◎米國人は男子の手の小さくて美しいのを笑ふ。日本では男子の手の小さいのを尊ぶやうな氣味がある。米國では足の大きいのは褒めない。

△眉

◎米國人は決して眉に剃刀を當てぬ。だから眉と眉とが皆續つゞきになつてゐる。鼻毛、耳の中等一切當ることをせぬ。髯は殆んど毎日美しく當る。

△頭髮

◎米國でイガ栗坊主は罪人丈けである。髮は大概中央から左右に分けてゐる。中には左から右のもあるが、中央からが七分通りだ。

△髯

◎米國でも髯を貯へてるのは意氣な方ではない。好男子を氣取る連中は多く無髯でゐる。青い痕の劃然したのが矢張り好いらしい。

△握手

◎握手にも種々型がある。學生風の握手は確りと堅く握つて強く振る。女でも學生はさうである。

遊び人などは遠い所から互の手を投げるやうにして持つて來て、パチリと音をさせて強く振り、握つた儘少しづゝ振つて話をする。そして顔と顔とを鼻の先の接する程接近させ、片手で他の肩の所を輕く叩く。此れは極く打ち解けた仲によくある型だ。

△男は力を要する

◎少年少女は兩親或は他の親しき長者に逢ふと飛び附いて、頸へぶら下る。女が車を下る時、男は夫れを下から支へる爲めに兩手を出す。女は掩ひかぶさるやう、殆んど全身を男の方へ投げ掛ける樣にフワリと掩つかぶさつて來る。男は下から女の兩腋の所に手をあてゝ抱いて降ろす。肥大な妻、或は戀人を持つた男は大力でなくては押しつぶされて了ふ。

△接吻を投げる。秋波。

◎停車場などで別離を惜むとき、若い女が男に接吻を投げてる風情は一寸好いものだ。

歌うたひが舞臺から聽衆に接吻を投げるのは餘り媚めいて嫌らしい。此れも輕

いのは好いが、隨分強い秋波を送つて、念入りの接吻を幾度も投げるのがあるが、安つぽくて嫌なものだ。吾々の目から見ると、能く氣はづかしくないことだと思ふ。

秋波も餘り働くと寧ろ無い方が好いやうに思ふ。秋波は有耶無耶の間に有るか無きかといふ機微な情味を傳へる所に價値のあるものと思ふが、餘り此れが露骨に演せられると秋波の意味が無くなりはせぬかと思ふ。

米國女優中、グランドオペラの花形として嬌名滿都を厭してるミス、アナ、ヘルドが舞臺に立つと、彼の女の秋波を觀衆の目から見ると、觀衆全體に送つてるように見えるさうだ。だから皆んな自分に送つてるやつに見えるさうだ。表情術も此所まで進むと豪い。

△泣き方

◎米國の婦は立ち泣きをする。立ち乍ら天を仰いで、兩肱を張り、拳で眼を掩ふて堂々として泣く。丁度日本の劍舞然たる泣き方をする。そして活歩して机の上か、暖爐のマンテルピースかへ泣きを持つて行つて、此所で立身で崩折れて肩を搖るがして大々的に泣く。

泣いてるかと思ふと、急雨一度霽れて、涙痕風に飛び、兩手を天地に活動させ長時間の啖呵を切る。其の勇氣眞に驚くべしである。

此の型は舞臺で常に見る型だが實際も大同小異だ。ハンカチーフを眼に當てゝシク〳〵泣く泣き方も間々あるが、此れは極く端役の泣き方で滑稽を意味して

る。米國の婦人は泣くのまでが大きい。日本の男子など斯ういふ泣き方をされては、其處置に困るだらう。

◎泣いて後姿を見せるのは好い型だ。日本の舞臺の泣き方は肩で泣かぬから泣が少さい。(併し今の舞臺では行はれて居るやうだ。)日本の泣く聲は鼻に持つて行く。米國のは喉へ引いて行く。鼻は少しも使用しない。鼻を使用する時は甘える時に用ひる。此れは日本と同じだ。

△走り方

◎米國の少女の走り方は一ト足づゝ大刻みと小刻みを食ひ違ひに、飛び上るやうにして走る。其の時輕い短かいスカートが波をうつ。輕快である。女の子も

男の子も夏は半スタッキングを穿いて脛は露き出しだ。女の兒はインデアンの靴のサンダルといふ皮製の日本の草履に似たものを穿いてるのがある。衛生にも好いであらう。

△ステッキ

◎米國では普通ステッキは流行しない。ステッキを持つて歩いてるのは老人かさもなければ若紳士が避暑地などで輕快瀟洒な服を着けてゐるときに、輕くステッキの中程を持つて歩く。ステッキを地に衝き、或は引きずつて歩くことは無い。

△襟飾

◎襟飾は服裝の中最も注意される。正面へ出る前看板で、此の一ト筋の布片の嗜好が其人全體の好尚を代表する位に重きをなしてゐる。だから紳士は少なくとも襟飾の二三十本は持つてゐる。寒暖晴雨によつて取り代へられるのは勿論のこと、朝と晝と夜といふやうに日光の陰晴によつて、それ〴〵色彩を考へてゐる。日本人は色彩に付いて餘り重きを置かぬ。羽織の紐でも濃い茶が好きとなると、何處までもそれで押し通してゐる。併しそれも好からう。

△食べ方

◎婦人が食事をする時には、ナプキンを膝の上に廣げて置いて、食すべき肉を最初格好に切り、左手を膝の上に置き、右手にフォークを持つて刺して食ふ。一々ナイフとフォークを使つて皿の音をさせるのは下品である。小さな口をして音をさせぬのは云ふまでもないこと。

△女の口髭

◎米國には婦人で口髭のあるのが能くある。伊太利の婦人などに多い。剃れば猶濃くなるから其儘にして置くのだ。日本の若紳士の薄髭位なのがある。亭主の心持はどんなものであらうとをかしくなる。

△バックピン

◎米國の婦人で――無論上流ではないが――時々スカートのバックピンが脱けて、下から白いペチコートが食み出してるのがある。無作法極まるものだ。日本の婦人が往來で帶の解けたより見つともなく我々は思ふ。彼等は深く氣にもとめぬらしい。中婆さんに能くある。老人だから色消しにもならぬ。

△帽子

◎米國の婦人は帽子を非常に大事にする。俄雨にでも逢ふと、帽子を新聞紙に包んだり、上衣へくるんだりしてる。スカーツを引きまくつて、帽子を隱くし

ペチコートを出して駈け出すのも遠足歸りなどに能くある圖だ。遊散場の俄雨は何處でも奇拔な滑稽劇が演ぜられる。

一時、「メリーウヰードー」といふ滑稽劇が流行し、其時から米國至る所非常な鍔廣の帽子が流行した。どの女を見ても恰で日本の早苗取り見たやうだつた。丁度其頃迚日の長雨であつたが、或る新聞のポンチ畫に、此の帽に柄を附けて日本の雨傘のやうにして歩いてる婦人の一隊を描いてあるのがあつた。可笑しいと思つて見た。

△襟と靴の踵

◎一時男子には高い襟が流行し、女子には高い踵の靴が流行し、兩方とも增々

高くなつて行つたが、其反動で急に低くなつた。ルーズヴエルト式などはダブルの極めて低いので、首の長い人には滑稽である。女の靴の踵もずつと低くなつてゐたが、後には中庸になつた。時好は何處でも斯うである。

◎正式の時は襟はシングルの折れたのに、ネクタイは白のボータイに限る。いろいろ思ひ〳〵にしてゐるが、餘り見よくはないものだ。

◎米國では日本の護謨入りの半靴と同じ型のを穿いてるのは老人に限られてる若い人で一寸と氣取るとボタン止めのを穿く。

△外套の裏

◎紳士は外套の裏を出して持たぬ。表の方を出して左の手に懸けてる。半可通がよく裏を出してる處などは日本と似てゐる。

△花の趣味

◎米國人も花を愛する國民だ。薔薇（ローズ）、菫（ヴアイオレット）、罌粟（パピー）、チユリポ、デジー、ゴルデンロットなど何れも代表的草花だ。彼等は此等の美花を酷愛する事に於て決して日本人に劣らぬ。

併し彼等は日本人の如く花木を酷愛せぬやうである。日本人が梅を愛し、櫻を愛し、梨花、海棠を愛する如くに愛せぬやうである。彼等は花と葉と枝と幹とを一木の中に合せ愛することを知らぬらしい。花と葉とが相映發する色彩、葉と枝とが相調和する姿勢が其所に自然の美を呈して來る造化の巧妙な消息を味

ふ丈けの趣味を持たぬらしい。持たぬではないが日本人の如く強くないやうだ。花は花丈けヴェースに盛つて其色の鮮かな所丈けを喜んでゐる傾がある。凡てが左樣でもなく、チユリポなどは其葉の靑く軟らかに延び〳〵したのと、其の花の黃におだやかに苔んだ形の配合を正に愛して居るのらしいが、どうも花は花丈け、若し葉を愛すれば、葉は葉丈けのものと云つた樣に單調に見て居るらしい。

嘗つて自分が或る家庭に寄寓して居た時、其令孃が庭に咲きみだれた西洋櫻の花を食卓に飾つて呉れと云つた。で自分は其幾枝を折つて此れを日本流に花瓶に挿した。すると其所へ令孃がやつて來た。自分の挿した花を見て突然、『それでは駄目だ』と素氣なく云ひ放つた。

自分は此の花を挿す時、多少注意を拂つて挿したのだ。頭から此の花の挿し方が『駄目だ』と冷笑されたので餘り好い氣がしない。

で、自分は反問して見た。

『何故駄目ですね？』

『だつて貴郎、此れぢやア些つとも美しかないぢやないか、もつと花を澤山一緒にして引き立つ樣に賑やかにして下さい、此んなに長い枝だの、短い枝だのがシヤチコ張つてゝ、葉が附着いて居ちやア花が別々になつて些つとも美しくないぢやありませんか。』

斯う云つて不滿足な顏をしてゐる。

此の令孃は自分と殆んど同年輩で、油繪もやり、作詩などもやつてる人で、文

藝の趣味がある。自分とは能く文學談をやるのだから、一向遠慮がない。其所で自分は令嬢を一つ屈服させてやる積りで、自分の花の挿し方に就いて說明して見た。何にも自分が日本の挿花に就いて智識を持つて居たのではないが、自分の此の花を挿した挿し方は、唯無意味のものでなくして、長きは長き、短かきは短き所、葉と花との粗密に就いても多少の注意を拂つてある。そして此の數枝の自然を損はずに此の一個の花瓶の中、自ら美花の笑を含んだ所を示さうと云ふ心持である、と云ふ樣な屁理窟を云ひ、附け加へに心や添へや、根〆の講釋や、天地人三才に型どつて宇宙の美を包含した處だなど大氣焰を吐いて聞かせると、令嬢は一向感心しない。そんな事は東洋流の思想で米國には通じない。我々は畳飯丈けの短時間に視た眼が一寸と美しければ好いのだ。我々の

目に華やかな花が賑はしくパッと映じて來れば、それで畳飯を食ふ時丈けの心持が好い。飯が濟めば斯んな挿花などを室内で見て居なくたつて、野外の散歩に行くのだから、如何な自然の花でも見得られるのだ。貴郎の議論は自然のやうで、不自然だ。東洋流の思想は何時も左樣云つた傾向がある。妾などの思想は今少し大きく廣い。と云つて反對に氣焰を吐き附けられた。

『ぢやア、貴女の嗜好通りに此の花をお挿しなさい。』

と云ふと、

『よろしい。』

と明瞭云つて、突然長短の枝を同じ長さに短かく折り揃え、葉を悉くむりし取つて、一ト束ねにしてヴェースに挿した。

『此れで美しいぢやないの？』

と云つて微笑しながら、ひらりと身を轉してパラーへ行き、サプラノの高い調でピアノを彈き出した。

自分は暫らく立つて其令嬢の挿した花を見てゐたが、成程美しかつた、そして、どうしても此の食堂の、此の食卓の上には、斯うした挿し方が能く配合つて見えた。

△螢、蟬、蜻蛉

◎螢も蟬も蜻蛉も米國人の目には唯の昆虫としか見えないやうだ。

米國には或る場所へ行くと、それは大きな立派な螢がゐて、闇の野に美しい光

りを縫つて、草の露に憬れてゐる。

放浪幾年の米遊中、初夏の夕に自分を慰めて呉れたものは、このあはれに可愛ゆき螢虫であつた。

自分は故園の情を、そゞろに惹き起しながら、何時までも野面の夜風に立ち盡すのであつた。併し自分の朋友の若い男、若い婦のいづれも、自分が螢にあこがれる心を少しも解して呉れなかつた。米國人には螢の光りは科學の研究材料となる他に文學的には觀察されてゐないやうである。ロングフエローの「エバン、ヂエリン」に螢光の水流に點する光景を歌つてある位のもので、其他にフアイア、インセクトの美化された詩歌も多くは見ぬ。よし詩人の材料に偶々することがあつても普通の國民の趣味は此の蟲に對してないことは事實である。

卿等は螢を詩的な虫とは思はないかと聞と、寧ろ其質問が詩的であると思つてるやうな顔付きをして、斯う注意されて見ると、有繋に美しくは思はぬとは云ぬへらしく、また美しいと思ひ出すらしい。

けれども、我々から警告されて驚く丈けで、元來螢に就いては趣味がないのだから、一向、それに就いての深い感想もない。

其所で自分は日本人が螢や蟬に就いて、多大な美的感想を持つてゐることを話すと、面白さうには聞いてゐるが、感嘆する丈けには身に染みぬらしい。

で試みに例の「戀にこがれて泣く蟬よりも泣かぬ螢が身を焦す」を飜譯して聞かせて見た。彼等には螢や蟬やを戀愛を歌ふ材料に捉え得た日本人の詩才をアクセプトする丈けで、其所に日本人が螢や蟬やに對して歴史的に一種の情趣を

持つてゐると言ふ所までは感じはせぬ。日本人が螢や蟬に對する愛情は恰かも胡蝶のそれに對すると同一であることを話しても、到底それは米國人のやうな單調な幼稚な、そして物質的な腦髓には會得し得ないのである。米國の一般的國民詩趣は極めて低いやうに思はれる。

「蜻蛉つり今日は何處まで行つたやら」を誰であつたか英譯してゐたが、其俳味を彼等に能く味はしめることは所詮出來難いのである。斯ういふ風に日本の作物が外國語に飜譯されるといふことは極めて難事である。今少し彼我の接近が密接にならなくては、相互の間に國風の情味を酌んで文藝の眞價を見出すと云ふことは出來難いと思ふ。

△米國に住める各國人種の性格

◎米國で最も卑められてゐる人種は（東洋人は別として、）第一は矢張り猶太人だ。猶太人にも露西亞ジュー、佛蘭西ジュー、日耳曼ジューと種々ある。彼のシャイロック以來、ジューの型はちやんと決定つたものゝやうになつてゐる。世界中商賣に掛けてジュー程な豪い人種はない。富豪は至る所に居る。併し貧乏人も夥多しい。猶太人の古着屋町、安洋服店などと來ると、全たく柳原以上だ。四倍五倍の懸價を云ふ。イカモノばかり卸ろして、そして暴利を貪ぼる。金の他に一點の廉恥心もないやうな半人間が此の陋巷に棲息してゐる。日本の赤毛布などで間々此の巣窟に足をふみ入れ酷い目に逢ふのがある。中にも露西

亞ジューが殊に動物に近い。

◎猶太人に亞いでは露西亞人、ポーランダーなどは隨分下等だ。高等なのも無論あるが、下等な出稼人が巣窟をこしらへて、露西亞や、ポーランダーは此の通りだといふ樣な野卑貧弱な形を丸出しにしてる。靴直し、古着屋などの店と來ると脚も踏み込めぬ。例の黑い髯むしやくゝの、丸太い、ヌーッとした體格をして、モスコーあたりの空の色と同じやうな眼の色をしながら、人を疑ふやうに凝視めてゐる。少しでも人の油斷を見濟ますと、何を仕出來すか分からぬ。頗る危險な動物である。彼等の音聲は太く濁つて、實に恐しいブロークンな英語を平氣で話してる。彼等には些の廉恥心もなく豚同樣だ。

◎杜翁やゴルギーなども斯ういふ國民を抱へてゐるのだから、自然其自己の責

任の大なることを考へるのであらう。斯ういふ國民の中に立つてゐればこそ、自己の偉大を自覺し、自國民を誘導し、自國を改革し、天下に其主義主張を號叫したくなつて來るのだ。日本のやうに國民全體が利巧で、敏捷で、キビ〳〵して居ては、詩人文學者が特別に國民を敎へる必要もない。國民の凡てが自覺して進取の氣性に富んでゐる。詩人小說家は國民と平行に步調を取つて行くより仕方はない。自分は日本の文學者に極めて偉大なものゝ出ぬのは此所だと思つた。

◎ゴルギー氏が米國に來た時、米國の文界は氏を歡迎した。併し直ぐに嫌いて忽ち排斥し始めた。米國人の偏狹なのは別として、米國人の目に觸れた一般の露國民が常軌を脫して下等な成績を示してゐる事などが、氏の爲に禍を成した

ことも鮮くなかつたであらう。氏が其愛人なる女優とホテルに同棲した故を以て、ホテルの主人は氏に退去を求めたなどは禮を缺くも亦甚だしい。氏が米國に對しての惡感情は後日に發表されたが、氏は更に米國に於ける自國民の狀態と、自國民に對する米人の感情に就いて大に學んだことであらうと思ふ。

◎和蘭、葡萄牙の國民も下等で無敎育だ。貧乏で愚で、米國人からは矢張り動物視されてる。米人が日本人を排斥するには意味がある。日本人の他日爲すある國民であるといふ意氣のほのめく所から恐怖の念が常に動くのである。和蘭や葡萄牙と來ると、既に眼中にないのだから、頭から輕蔑して掛つてる。日本人を蔑視する意味とは意味が違ふ。

◎伊太利人、西班牙人となつて來ると、其勢力は中々なものだ。彼等の富は大

事業を計畫するに耐ゆる。彼等は農園に工業にそれ〴〵團體的の資本を投じて着々其功を奏してゐる。加州に於ける伊太利人の所有に屬する葡萄園の如きは大したものである。

併し伊太利人町、西班牙人町は矢張り社會の下層、貧民窟の本場だ。支那人町日本人町に引續いて塵埃の中に其本國の缺點を有りの儘に著はしてゐる、伊太利人は一種殺伐な氣が眉宇の間に潜んでゐて、黑い眉、落ち込んで暗黑に光る眼、殺げた頰は其骨に殘忍な相貌を見せ、濃い黑い口髯が、一文字に結んだ唇を半ば掩ふてゐる。其性格は其容貌に能く見はれて、殺人罪、賭博犯等有らゆる罪惡は限られたる彼等の社會に繰り返されてゐるやうである。

伊太利の婦人は男性的な顏立ちで、人をチャームするやうな色氣に乏しい。沈

痛で重くろしく、亭主殺しでもやり兼ねないやうな婦が多いかのやうに思ふ。此等の婦人が伊太利亞町を來往してるのを見るに、貧民だから無論其外貌を飾ることは出來ないが、それでもたしなみがあれば斯うではあるまいと思ふ程に亂雜で、凡てが荒み切つてゐる。汚れて鼠色になつたショールを肩から、或は頭から引つ冠つて、スカートをだらしなく引きずり、大きな靴を重さうにばたばた穿いて平氣で隣近所を喋り廻つてゐる。所謂金棒曳の多いことは此の町に限られてるやうに思はれる。隨分家庭の波瀾が此等の男女によつて引き起されることだらうと思ふ。

伊の作家ダンヌンチョの作風が自づから伊國の國民性を現してゐることを自分は感じた。伊太利が音樂の國であり文學の國であるのも、斯ういふ國民が必然

に要求する心的調和の然らしむる所以ではなからうか。

此れを露國の民の尨大にして怨味なる如く、そして灰色に濁つて居る如くなるに比して、伊太利の民は神經質で、而かも殘忍な程沈んだ色が底に青黑く光を潜めてゐるやうに思ふ。

◎西班牙は伊に比して輕快な所がある。精悍で、敏捷で、意地惡い氣味はない淡白な洒落れた氣性は、どうしても水兵的である。色彩から云へば淺い茶褐色であらう、自分は西班牙人を好きであつた。

◎希臘人となると、餘程此の兩國に比して下等で無敎育だ。和蘭、葡萄牙と同一線上に居る。希臘の民を現代に見ると、往昔如何して立派な歴史を作り得たかと疑はれる。彼等には既に抱負がない、理想がない、國家的觀念がない。貧

弱國の民は憐むべきである。

◎伊太利人、西班牙人には花商、斬髪屋、古道具屋等が多い。賣春婦も此の兩國から大分產出するやうである。希臘人には土方の勞働者がエライ風をして漂泊して歩いてゐる。

◎米國で愛蘭土人といふと一種輕侮の意味を含んでゐる。日本で伊勢乞食とか近江泥棒とか云ふやうな意味がある。そして愛蘭土の婦人は房州女と同じやうな意味がある。紐育、華盛頓、其他何れの都會でも、家庭の中に此のアイリッシュ種の女が下婢として住み込んでゐない所は殆んどない。そして其下卑た調子の英語が酷く耳に觸つて嫌惡の念を發せしむる。彼等の容貌も美でなく、性格が下劣で、無理想で、そして頑迷で、執拗で、例のキャソリックの固まりで

始んど度し難い。敬神の念のあるのは好いとして、此れが其の自個問題となると飛切りの個人主義な、吝臭い野鄙な根性をさらけ出して來る。凡てが斯うとは云へないが、一體に斯んな傾向がある。米國で愛蘭土人と云ふと鼻摘みにしてゐるのは所以ある哉だ。

だが、アイリッシュは豪い所がある。豪いに掛けては何國にも引けは取らんであらう、彼等は無遠慮で押が強くつて、耻しいなどゝいふことは夢にも知らぬその「シャーック」の固まりで押して行く手腕と來たら大したものである。アイルランドの貧乏島の瘠地に出來たアイリッシュポテトーで生命を繋いでゐた者共が、俄かに此の米國のやうな富有豪奢な大國に來たことだから、勞働の賃銀も高し、勞働も容易なり、働口は有り餘る程あると云ふのだから彼等は寶窟に

でも迷ひ入つたかのやう此所でシッカリ一つ褌を締めて一生の計を爲さうと云ふ氣になり、一心不亂に働き出す。其所で二三年の中にめき〳〵立派な成績を擧げ一文無しで流れて來た素寒貧が、急に金持になるといふ騷ぎだ。元來が氣の強い、意地ッ張りの豪の者だから、中々斯んなことで氣を弛めはしない。愈愈奮闘の精力を增進して來るので、アイリッシュの米國に於ける勢力は大したものである。

同じ英國でもイングランド、スコットランドは所謂英國人のゆつたりした紳士的性格を見はしてるが、アイルランドと來ると、餘程型が異つて來る。イングランドの人は此のアイリッシュを特に擯斥する。

アイルランドの婦人は赤茶けた髪をして、睫が赤白く、眼の端が明瞭せず、顏

にそばかすなど多い。全體に美的でない。婦人らしい艶麗な趣が極めて乏しい。

當今英國の文壇で最もポピュラーな作家として彼のホール、ケーン氏は愛蘭土の產だ。彼の作には愛蘭土を舞臺に取り、同島人を主人公にしたものが頗る多い。有名な『クリスチャン』の如きそれである。女主人公のグローリーは頗る美人だが、斯ういふのも無いではなからう。グローリーの性格は負けぬ氣の、奮鬪的な所が能く愛蘭土人を現はしてゐると思ふ。

◎英國人、獨逸人、佛國人等は吾人の平生感じてゐると殆んど同じやうな傾向だ。中で自分の好まぬのは日耳曼人である。佛國人は情に脆ろく、餘程日本人に似てゐる。佛人の家庭に居た後に日耳曼系の家庭に行くと窮屈で義者張り過

ぎて、居心地が惡るいと云ふことだ。

英國人は矢張何處までも英國人だ。何處となく奥床しくして好い所が多い。斯ういふ風に各國民悉く性癖を異にしてゐる。併しながら、此等の性癖を異にした國民を一括して作り上げたものが北米合衆國である。そして北米合衆國の亞米利加精神といふものが形作られてゐる。此等の國民を包括して一種の國民精神が出來、凡ての國民が多少共に此の國民精神を感受してゐる。亞米利加の國民精神を最も立派に發揮したものは建國當初に於ては華盛頓、中葉に於てはリンコーン、現代ではルーズヴェルトである。

△米國人の黑人種逆殺リンチ法

◎米國人は現代文明の代表者かの如く云つてゐる。彼等の自負心も或る程度迄は許すことが出來る。併し彼等は天與の富によつて新世界の樂天境に棲息する幸運を神に謝することを忘れて、只管榮華の夢にうつゝを抜かしてゐる所がある。

彼等は自惚れてゐる。お調子に乘つて天狗になつてゐる。彼等の高い鼻柱は必らず挫き折られる時節が來るだらう。來ねばなるまいと思ふ。

彼等は文明の代表的國民を標榜しながら、實は人間にあるまじき非義非道を行つて平氣でゐる。平和も人道も此の事實に徵しては實に白銅一粒の價値も無くなつてしまふ。米國は基督教國で、彼等は基督教徒だ。博愛を主義とし神を崇め、人道を尊ばねばならぬ筈だ。だのに彼等は食人國の鬼に等しい行爲を敢て

して平氣だ。

世に憐れむべき人種は黑人種である。彼等は神の如何なる冥罰を受けて此の世に生れて來たのか知らぬが、彼等は生れながらにして眞黑である。其皮膚の醜惡は彼等の全身を塗抹して、もはや人間として最下等たるべき缺點を脫却する餘地がない。彼等は無智蒙昧、殆んど野獸と撰ぶ所が無かつた。此の時代——即ち黑人種が奴隸時代に於ける彼等の受けたる虐待は既に過去の事として葬り去るとして、南北戰爭以來、彼等はリンコーン氏の手によつて扶ひ出された。そして此の公平自由の世界に漸く人間らしくなり得た歷史の跡を殘してゐる。彼等は奴隸根性から覺醒して、今は米國の國民である。彼等の中には高等の教育を受け、高等の職業を執り、高等の生活をして、おさ〳〵白人に劣らぬ才幹

手腕を振つて居るものもある。彼の有名な教育家ブーカ、チー、ワシントン氏を始め黒人種の中に有爲な人物の輩出してゐることは事實である。既に斯く黒人種は發展の實を擧げて着々好良の境を進んでゐるのである。だのに現代文明の代表者であるかの如く自任せる米國人は、此等黒人種の頭上に向つて猛獸毒蛇に加へるよりも甚だしい酷烈な虐待の實例を擧げて、そして快哉を叫んでゐるに至つては實に野蠻も甚だしいと云はねばならぬ。

黒人種の性格は極めて激し易い。彼等は感情を抑制することが出來ぬ。彼等は日頃から白人の迫害を無念がつてゐる。此の憤りは短急性の彼等によりて種々な惡結果を來たす中に、黒人種の男子が、屢々白婦人を辱しめる事實が擧つて來る。黒人種は情欲を抑へる力に乏しい所から、野外楚々たる白婦人の艶容を

望見しては遂に其是非善惡の判別を失つて了ふのである。斯くして彼等は强姦を敢てする。

此の事の一度發覺するや、一鄕の白人は狂奔して起つ。白人の一隊は憤怒の叫びと共に手に〳〵兇器を提げて犯罪者の探索に取り掛る。彼等は戸々黒人種の家に亂入し、銃を放ち、白刃を振り廻し、亂暴狼狽殆んど餘す所がない。折から若し犯罪者が此の重圍を脱し去つて山林野外に遁れ去るときは、白人の一隊は猛獸狩と何んの選ぶこともないやうな暴擧に出で、此れを追及せずには已まぬ。

そして遂に此れを捕獲すれば、其犯罪者を野外の樹枝に吊り下げ、下に薪を積み、石油を注ぎ、焰々たる猛火の中に犯罪者を焚殺するのである。そして更に

此れを射擊し、此れを寸斷し、其の骨肉を粉碎せねばやまぬのである。

若し此の白人の一隊に向つて、警官の反抗を試みるものがあれば、立所に擊殺されて了ふ。だから警官も共に此等白人に聲援して其非業を遂行せしむることに盡力し、官民共に犯罪者を私に焚殺して漸く其憤怒の念を癒すのである。

併し斯る場合に於て若し犯罪者の踪跡を失するやうなことがあれば、犯罪者以外多少嫌疑の掛つてゐる黑人を捕へて其身代りに焚殺する。また犯罪の眞僞有無等をも確めもせずに、輕舉直ちに嫌疑者を殺害し去つて快哉を叫んでゐる。

米國では此れを焚殺法と稱し白人が黑人を私に殺戮する唯一の習慣法としてゐる。今日現に南部の諸州に屢々實行されてゐる。そして白人は些も是を恠しまず、相當の刑罰かの如く心得てゐる。

文明國の代表的國民を以て自任したる米國人にして、斯んな沒人道、無法律な所爲を敢てするに至つては彼等は到底文明國民の風上にも置る人間ではない。

吾人は米國人が其富によつて得た現世の榮華に醉ふて、屢々人道を蹂躙して恠しまぬのを憤慨せざるを得ぬ。

△「アンクル、トムス、キャビン」の作家

◎黑人種に向つて、文學的作物中最も多大の同情を寄せた作物は云ふまでもなく「アンクル、トムス、キャビン」である。作者は米國の閨秀作家中最も有名なハリエト、ビーチャー、ストーウ女史である。

女史は千八百十一年にコヂクチカット州のリッチフヰルドに生れた。女史の父

は同市のコングリゲーショナル教會の牧師であつた。

女史の二十前後に父はシンシナチーの牧師に轉任したので、女史も亦此所に移住することゝなり、此の際宗教學校の教授であつたカルヴヰン、イー、ストーウ氏と結婚をした。女史は夙に奴隷問題に就いて一家の持論が有た。ストーウ氏も女史の父及び女史等と同志の人であつたらしい。氏は一個の文學者ではあつたが所謂生きた字引の方であつたと見え、左程社會の耳目を惹く人ではなかつたが、女史の文藝的才能を遺憾なく發揮せしめたのは此の溫良恭謙な紳士の力が頗る與つてゐる。結婚後の數年、女史等夫妻は甚だしく生活問題に苦んだらしい。其中ストーウ氏はメーン州のボードウエン大學校の教授に聘せられたので女史も其行を共にした。この大學からはホーソンやロングフエロー等諸

文士が輩出してゐる。彼是する中に奴隷問題は破裂して米國の社會は殆んど此の問題の爲めに熱狂の絶頂に達した。此の際女史の大作『アンクル、トムス、キャビン』は時勢の要求につれて發行された。最初は逐次出版物として三百弗の原稿料を得たらしい。所が存外評判が好いので、ボストンの出版業者のジエウエット氏といふのが好意的に女史等夫妻に申し出た件は、此の書を單行本にして發行し、其の出版費用も、利益も共に折半することにしやうといふのであつた。併し當時は女史等夫妻の家計は甚だ不如意勝であつた爲めに此の好意的の申込みも納れることが出來なかつた。其所で遂に總賣高に對する利益の一割を受けることにして折合が附いたらしい。

其所で『アンクル、トムス、キャビン』は單行として出版された。すると初刊

の三千部は直ぐ賣れ、再刊は次の週に賣り切れてしまふ。三版も數日の後無くなる。とう〳〵一年間に百二十版を重ねて三十萬部を米國の國内丈けで賣り、數ケ月間に女史の得た利益は一萬弗に達した。

斯ういふ大當りで、それから女史の作物はトン〳〵拍子に賣れて行つた。もはや女史は貧乏教授の妻君ではなくして堂々たる天下の大作家となり、收入も極めて多かつた。後女史はコネクチカットのハートフォード市に住し、夏時はフロリダ州の宏壯な別邸に悠々筆を染めてゐた。そして女史の作中、『アンクル、トムス、キャビン』は其處女作にして其大傑作であつた。そして米國の小説中最も多くの讀者を有し、また最も多く他國の國語に飜譯された。それから此の作がドラマタイズされて劇としての成功も大なるものである。女史が、當時の

時事問題たる奴隷廢止問題を其作物の主題に捉え來つたことは、所謂際物だ、此れを場當りを主としたと云つても好い。併し女史が此の作に筆を染める時の態度は餘程立派であつたらしい、女史自らは斯う云つてゐる。

"I could not control the story, it wrote itself; and I the author of "Uncle Tom's Cabin"? No, inded. The Lord himself wrote it, and I was bnt the humblest of instruments in his hand. To him alone should be given all the praise"

此れで見ると、作家の立場として實に立派な言葉だ。吾人は必ず女史が此れ位の精神で此の作を爲したであらうと信ずる。そして場當りを目的の作物で無いと云ふことが分る。即ち女史が異人種に對する同情心と、人道を尊む敬虔の念とが、女史をして此の作を爲さゝるを得ざらしめたのである。だから女史の此

の作は小説を作らんが爲めに作つた小説ではない。小説を作らんが爲めに此の時事の大問題を捉へて來たのではない、場當りをしてヤンヤと言はせ、際物で一と儲をしやうといふ野心があつたのではない。女史が眞理を愛する赤誠が、やがて、此の作を爲さでは止まざらしめ、此の問題を捉へて研究せでは止まざらしめ、そして自己の信念の存する所を世論に訴へて社會の覺醒を促さずに居られなかつたのである。場當りなると、際物なるとは女史の關せざることであつた。

女史の奴隷問題に對する持論は明かである。そして此の作に對する主張や主義も無論明瞭である。併し女史は小説家であつた。女史は小説家の態度を以て此の問題の解決を試み、此の作に對する作家の用意を示した。此の用意はやがて

此の作の大成功を爲した所以で、そして米國の文學史上女史の名が不滅である所以である。

女史が小説家としての手腕の大なる所以は、此の作に對して女史は何等も作家自身の奴隷問題に對する主張が述べてない。露骨な攻擊や、反對論を自家自らが論議する程女史の頭腦は非文藝的でなかつた。女史は奴隷使役の實況を、其善面と惡面との兩面を、當時の社會に見はれたる其物其れを直寫した。即ち善面に於ては南方の大地主にして善良溫和なるセント、クレアーを編中の人物として見はし、惡面に於ては北方の傭主にして殘忍酷薄なるリーグリを見はし、また奴隷側に於ても善惡兩面即ち柔順なる奴隷と、猛惡なる奴隷とを見はし、そして兩面の對照を明瞭にし、此れを社會公衆の眼前に公開した。女史の責任

は此所に終つた。他は一切萬事讀者の判定に任じて了まつた。讀者は此を一讀して如何なる感想を得たか。面白かつたか。可笑しかつたか。恥ぢたか。後悔したか。反省したか。奮發したか。勇氣を鼓舞されたか。其所には種々雜多なものがあつたであらう。併し作者自身は誰からも敵視され憎惡されなかつた。作家自身は社會に見はれた現狀を直寫したばかりだ。其所に偏頗な見解を下し、自家の主張に拘泥して曲直を强ひてない。作家は編中の人物を以て其人物の云ふべきことを云はせてある丈けである。正直な男は正直なことを云つてゐる。惡黨は危險極まることを云つてゐる。是は如何とも致難い。

社會は手を擧げて此の書を歡迎し、凡て此れを讀むことを好んだ。女史の用意は此所に全く功を奏し、或る目的を以て其目的を書きたる小說類及び其の他の

作物よりも、より遙かに長き生命を其作に得ると同時に、また其作家自身の主張は行はれ、目的は其等以上に達せられた。

自分は女史が此所に留意した作家としての用意と、又其作家としての態度とが女史の大手腕として長く文學史上に特書さるべきことであらうと思ふ。

△憐れむべきインデアンと『ラモナ』の作家

◎更に吾人の眼から見て同情の念に堪えぬのは亞米利加土着の住民、即ち彼のインデアンである。

彼等の現狀は實に憐れむべきものだ。生存競爭の社會から全く追ひ拂はれて、年々歲々其種族は消滅しつゝある。黑人種族が向上發展の好成蹟を擧げつゝあ

るに反して、彼等の勇敢なる天性は自暴自棄の絶頂に達し、もはや如何ともすべからざる迄に墮落してしまつた。

米國人は彼等に逆待の他何物をも與へなかつた。キャプテン、スミスとポカホンタスの美しい物語は再び繰り返されなかつた。

アービングや、ロングフェーローやは散文により詩によつてインデアンに同情したけれども、當初に抱ける米人の惡感情は到底解けなかつた。そして矢張り彼等の逆待は繼續されてゐた。

此の悲慘なインデアンの末路を見て多大の同情を辯らし、献身的にインデアンの爲に盡した女流作家がある。ヘレン、マリア、フイスコ女史である。女史はストーウ女史が黑人種に同情したるより以上の大なる慈愛をインデアンに垂れ

たのである。其作家としての名聲は無論ストーウ女史を以て推さねばならぬけれども、フイスコ女史（後にジャクソン夫人となる。女史が筆の人となつた時代はジャクソン夫人時代である）がインデアンの爲に萬斛の涙を灑いだ『ラモナ』の作は『アンクル、トムス、キャビン』と共に長く女史の傑作として記憶すべきものであらうと思ふ。女史は千八百三十一年八月十八日、マサチユーセッツのマムヘルストに生れた。女史の父は此の町の大學教授であつた。女史はイプスウツク女學校の卒業生で、二十歳の時海軍大尉と結婚し、三十歳前後までは海軍々人の妻女として所々の軍港に移住してゐたらしい。

良人の死後遺子を伴れてロードアイランドのニューポートに寂しい生涯を送つてゐた間に唯一の慰藉なる愛兒に死なれ、數年間寂寥を極めた獨身生活をして

ゐたが、糊口の爲めに遂に文學を以て世に處せんと決心し、良人の死後二年にして始めて紐育の某紙によつて其の數篇の詩は發表された。

女史は其少女時代にボストンの某紙に短詩數篇を寄稿したことがあつたが、其後は決して筆を執らなかつたらしい。三十歳を過ぎて始めて其の名聲は批評家の筆によつて傳へられ、散文家とし詩人とし、また少年文學の作家として文界に重きをなした。

女史は其後健康を恢復する爲めにコロラド州に遊び、山水明媚を以て誇るコロラドスプリング市の商人ジャクソン氏と結婚した。女史は此所に其筆硯を改めて諸種の作を世に公にした。其の中で『エ、センチュリー、オブ、デスオーナ』は最も有名である。

女史は常にメキシコ、カリホルニヤ諸州を遊歷して作物の新材料を集め、盛んに其健筆を揮つた。そして女史の畢世の事業は憐むべきインデアンに向つて其慈善を施すことであつた。女史の傑作『ラモナ』は即ち女史の最後の作であつた。また最大の事業であつた。

女史の盡力の功空しからず、政府は爲めにインデアンに向つて特遇を施すべき方針に出るやうになり、所々にインデアンを保護養成すべき學校等は設けられ、女史の目的は或る程度まで達せられたのであつた。

米國を旅行する人は、落機山頂、コロラドスプリングに近く、シャイアンキャンヨンの絶景の中、此所に岩石を積み重ねたる一基の墓石を見出すであらう。そして泉聲靜かにして松檜長へに風に鳴る所、一軒の小やかなる木小屋を

見出すであらう。前者は女史の長に眠る所であつて、後者は女史が其詩文の筆を驅つた草庵である、

ストーウ女史と、フヰスコ女史とは共に憐れむべき人種の爲めに其熱涙を灑いだ涙ある閨秀詩人小説家の兩對である。

△米國人の喧嘩振——日本刀の威嚴

◎米國人の喧嘩と來ると、是が一種の特色を露はしてゐて頗る奇だ。自分は喧嘩に趣味を持つてるので、日本にゐた時から、それッ喧嘩だ、といふと直ぐ飛び出したものだ。火事にはどういふものか一向氣乘がしない。摺り半鐘の音を聽きながら、すや〳〵寢るのが寧ろ好い氣持ち位であつたのに、喧嘩といふ聲

を聞くと、どうしてもぢつとしてゐられない質なのであつた。

で、米國へ行つても能く喧嘩を見て歩いたし、また自分でも二三度取つ組んで見たことがある。そして米國流の喧嘩が斯んなものだ、と知つてから、どうも腕立てをする氣が無くなつてしまつた。

◎凡て喧嘩の花といふものは、不圖したことで咲くものだ。往來で突き當るとか、一寸と電車の中で足を踏んだとか、左樣でなければ下らぬ痴情の云ひ爭ひだとか、買物の掛引からの間違ひだとか、酒の上の行き違ひと云つたやうなことだ。是は日本も米國も同じことで、一體に盛り場で起るのが多い。例へば紐育で云ふと、コヲーアイランドの夏の涼場だとか、東の第三街から、チヤサムスクエアの魔窟であるとか、ヘーマーケットであるとか云ふやうな場所には無

賴漢が巢を食つてゐる。どうしても氣の逸い連中が多いから、何にかの果ては喧嘩だ。

◎日本と同じ樣に始めの中は双方で二言三言云ひ爭ふ。段々聲が高くなる。一方の氣の逸さうな奴が、ヒョイと手を出して、敵手の横面でも毆る。サア是れから大立ち廻りになる。此の立ち廻りが始まる迄は、東西其喧嘩振りに大差はない。

◎愈々腕力沙汰になると、双方が開き直る。二三歩後に引き下る。そして先づ上衣を脱ぐ。若し眼鏡を掛けてゐるものがあれば、眼鏡を脱す。若し眼鏡を其の儘で立ち向ふやうだつたら、敵手から其を取り脱づせと注文する。(米國では眼鏡をかけたものに向つて喧嘩を仕掛けて顔面に負傷させると、加害者の罪が

重いのだ)双方で用意が出來ると、例の拳闘の型で身構へをする。普通左手を顔面の高さに面部を防いで臂を彎曲させ、右手は恰かも敵手の横腹邊を狙つて後方へ引いて彎曲させてゐるのが、普通日本の擊劍の構へで云へば青眼につけた所だ。此れが上段にも下段にも、また捨身の構にも變化するやうに、拳闘の型も種々變化するが、大概は今云つたやうな構を取つて、『カム、オン!。』と掛聲が双方から出る。と、もう血眼になつてる。腰の働きが米國人には乏しいので、腹から以下の立身の用意が不完全だが、腹以上の姿勢は立派である。

◎斯う云ふ風に双方互に隙を狙つてゐる。一方から飛び込んで、振り固めた拳を顔面なり、胸なり、脾腹なり、其急所〳〵を狙つて一氣に突き立てるのだ。一度突くと大概連發を試みる。敵はそれを防ぎ、且應じて、暫らくは双方で突

き合つてる。やがて立ち分れて、また狙ひ始める。此所で氣合ひの爭ひになるのだが、勇氣に富んだものか、拳闘術に練達したものか、何れにしろ相手以上に精力の勝つたものが、ぢり〳〵肉薄して來て、此所と云ふ所を、ドンと突く其れが急所へ旨くきまると相手はドッと倒れてしまふ。一方が打ち倒されるまでには鼻血が出る。合しては分れ、分れては合し、彼是する中に前齒の折れるのもある、胸骨の挫けるのもある。トゞの結局一方は地上に倒れて了ふ。

◎打ち倒した勇士は此時身構へをした儘、敵手の再び立ち上り來るを俟つてゐる。若し勇氣の激しい男であれば、猛然として捲土重來の勇を奮つて再び相撲つ。そしてまた何れかは打ち倒される。そして起き上つて來るのを俟つてゐる。

◎かくして遂に氣力盡きて、奮闘力が無くなれば、此所に初めて勝敗が一決す

るのである。此の時觀衆か、或は勝者かゞ、打ち倒された敗者を引き起し、双方は握手をして、他意なきことを示して立ち分れるのである。此の結末に至るまでの時間は可也長い。其長時間を彼等は實に根氣能くやる。眞面目に其の勝負を爭ひ、少しも卑怯な態度に出ぬ。彼等には此の間奇策を行ひ、或は策略を以て勝を制するなど云ふやうなことをせぬ。また兇器を揮つて敵を脅し、或は眞に此れを撲殺するやうな非常手段も用ひぬ。單に喧嘩となると、常に此の一種の型にはまつた手段一つに出て、双方は極めて愚直な腕力の勝負をするのである。丁度拳闘者の競技を、定まつたアンパイアー無しに街頭來往の中で見ると同じであつて、日本の喧嘩のやうに、花火線香的のものではない。

◎米國の喧嘩は入り亂れて相撲つといふことは少ない。喧嘩の當の敵同士相撲

つて他の朋友或は公衆は、ぐるりと此の格闘者を取り圍らして傍觀してゐる。少しも聲援を與へぬ。また仲裁しやうともせぬ。結末まで默つて見てゐる。朋友が打ち倒されても、其は朋友の腕力の足らぬものだ、として斷念めてゐる。半分泣きながら、相闘つてゐるのを見て、其朋友は腕を拱いてゐる。此の邊はとても吾々日本人では出來ぬことだ。朋友の難を見ては、是が非でも腕を出さずには居られぬのに彼等は平氣な顏をしてゐる。格闘者自身も聲援を得られぬものだと思つてゐるのである。

◎巡査が來て、矢張り立つて見てゐる。非常な出來事を引き起さぬ限り傍觀してゐる。日本には無い事である。兇器を揮つて他の生命を咀はぬ限り見て見ぬ振りをして悠々と濟し込んでゐる所は、流石大國の國民だと賞めたくなること

もある。併し喧嘩をした以上、斯ういふことで承知が出來る米國人には、眞の魂があるのか、腸があるのか、と思ふ。大腹中と云へば左樣かも知れぬが、吾々には無神經のやうに見える。鈍い腦の國民のやうに思ふ。だから米國人は日本人のやうな鋭い氣性を持つた國民と喧嘩をすることを恐れる。日本人が一度憤然として怒を放つと、其生命を絶たねば止まぬ。短刀を彼等の胸に刺し通して、三寸氣息絶つて後、始めて其喧嘩の完結を見るものだと思つてゐる。だから日本人は聲援もする。必死の力も盡す。我を忘れて了ふ。熱中の餘りには奇拔過ぎる行爲に出る。吾々は米國人の喧嘩を見て餘り悠長過ぎるので齒掻ゆく思ふ。男子らしい處もあるが、眞の男子の喧嘩は斯うではあるまいと思ふ。併し喧嘩は到底所謂喧嘩だから、斯んな事で好いのかも知れない。

◎自分が或時料理店に夕飯を取らうと思つて、ぶらりと其の店へ這入らうとした出合頭に、内から二人の米國人が戸を開けて出て來た。自分は少し身を展いて彼等を外へ通さうとした拍子に一人の三十五六の肥大漢は突然自分の帽子を拂つた。

自分は此の瞬間に勃然として怒つた。

『何をしやがる。』

斯う怒鳴ると、

『何んだ、日本人奴。』

と、せゝら笑をして啣へ楊枝で向ふへ行かうとする。自分は此時に限つて怒を抑へる力を失つた。

引つ返へすと、後から、ドンと其男を突き倒した。彼はよろ〳〵よろけたが、全く倒れはしなかつたから、更に一撃を加へ、前へ廻つて大外ガリをかけ、物の美事に打ち倒した。けれども彼は立ち上つて來て、例の拳闘の型で向つて來る。自分も止を得ず、其の型をやつた。自分は拳闘術は心得て居らぬが、不思議なもので、米國へ來て斯ういふ場合に望むと、知らず〳〵拳闘の型に出て行く。自分は少しばかり撃剣と柔道の心得がある。撃剣の構に柔道の體を加味し拳闘の型を取つたのだが、どうしても彼の一撃を支へるべく甚だ覺束ないやうに思ふ。それで、一ト撲で勝敗が決せられるものならだが、彼等は倒れても倒れても起き上つて來る流義である。此れでは遂に勝を彼の爲めに制せられねばならぬ。と斯う思ふと、甚だ心細い。

◎其所で自分は一計を案出した。體を引くと同時に、常に護身の爲めに短刀をズボンの後のポケットに潜ませてある。それに左手を衝つ込んで引き出すと、右手を鮫皮の白鞘に掛けて、突然黑漆の鞘を拂つた。ギラリ！　鍛ひ上げた秋水の光りは彼等の眼を奪つた。此の時自分は前に進んだ。

『貴樣、生命が惜しくはないか。生命が惜しくなけりやア、サア、向つて來い俺は貴樣と喧嘩をする以上、貴樣を殺さねば止まぬのたぞ。』

自分は斯う云ふ時には馬鹿度胸の据はる性なので、頗る流暢で、而かも勢の强い英語でタンカを切つて見せた。

すると、何の事だ。彼は一目散に逃げ出した。横に立つて見て居た朋友も、他の觀衆も一度に其所を開いたから、自分は悠々と其所を去つて歩んだが、半丁

程行くと、自分は夕飯を食ひに行くのだつた、といふことに氣が附いた。引つ返して以前の料理店へ行かうかと思つたが、兇器を持つてゐたから後難を恐れて四五丁先きの料理店で仕度を濟ましたことであつた。

◎要するに、米國人の喧嘩は本氣でない。だから我々日本人の喧嘩腰の强みを見せると、彼等は忽ちグニヤリと來る。自分は平生此の手を用ひて、一度も成功せぬことはなかつた。兇器の中でも彼等は殊に白刃の光りに恐れる。吾々は短銃の音や形を餘り心持ちよく思はぬが、彼等は此れには、さほど驚かぬ樣子である。だのに白刃と來ると、ギョッとするらしい。日本以外の國民に見せて彼等の膽を寒からしむるもの、日本の製作品中白刃が第一番である。さすが日本刀の威光だ、と自分はいつも小氣味よく思つたことであつた。

△日本人の喧嘩振に惚れた米國婦人

◎喧嘩の話の序に面白い戀物語がある。

自分の友人に大塚と云ふ男がある。此の男は名代の喧嘩屋だ。隨分思ひ切つたことをやる。脊せぎすな、色の青い、見た所は弱は〳〵しい男だが、其顏は何處となく負けぎらいな氣性を示してゐる。大勇、沈着といふ男ではないやうだが、思ひ切つた喧嘩丈けは出來る男であつた。

此の男がバルチモア市の夏場の娛樂園に日本人の案出した「ジャパニース、ボーリングゲーム」といふ店を出してゐた。此れは球投げの遊戯で一寸米國人などには目新らしい所から一時流行した。

大塚は此の店を出して、盛んに客を呼んでゐた。流行は恐ろしいもので、他の興行者を壓倒する勢だ。其所で商賣敵が出來て來る。土地の地廻りをそゝのかして大塚を取つ締めて、此の園内から放逐しやうといふのであつたらしい。

◎或る晩、無賴漢が二三人店頭に立つて、種々商賣の邪魔をする。『助平』だの『ジャップ』だのと惡口を云ふ。球を其所等へ投げ散らす。隨分甚だしい迫害をやるので、大塚は我慢しきれなくなつた。元來短氣な男だから、突然店を飛び出して、無賴漢の一人に向つて强い『ブラック、アイ』を食はせた。

◎忽ち大立廻りが始まる。無賴漢は拳闘術を以て一擊の下に大塚を打ち倒さうと打ち向つて來た。大塚は幾度も白人との喧嘩に經驗がある。身をかはして、手元に付け入つて、大の男に腰投をうつた。米國人は腰のない人間だから、コ

ンクリートの堅い地上に仰向けに投げ出された。彼はウンと云つて起き上れない。

◎他の無賴漢はおのれとばかりに大塚に向つて來た。此れが多少米國流の紳士らしい男ならば其儘落着したらうが、何しろ無賴漢だから、大塚を見くびつて撲ち掛つて來た。其れを美事に三人ながら取つて投げた。大塚は柔道を心得た男ではなかつたが慓悍無類の男で、其の素早さは非常であつた。遂に立派な勝を制し、觀衆から大喝采を博した。其の爲め大塚は園内の評判男になつた。

◎此の喧嘩の最中に丁度大塚の店で球遊をしてゐた一人の若い婦人があつた。第一番に大塚の勝利を博した時に握手を求めたのが此の女だ。其の日は五弗程球遊んで歸つた。

それから毎日此の女は大塚の店へ來た。大塚を伴れ出して料理屋へ行くこともあつた。そして大塚の喧嘩振りをいつも褒めそやしてゐた。

此の婦人は相應の家庭に育つて、教育もあつた。小柄の美人で、髪の色のブライト過ぎる程、眼の色の青過ぎる程の生無垢の米國婦人で、血はジャーマンの血を受けてゐた。此の婦が、喧嘩後三ヶ月して大塚の妻になつた。今も大塚と一緒に貧乏をしてゐるが、相思の情は更に濃かである。

◎自分は能く此の婦人から大塚の惚氣を聞かされた。喧嘩が取り持つた緣だから、今でも時々夫婦喧嘩をするけれども、腕の強い大塚が妾にはいつも負けてゐると云つて笑つてゐた。そして妻君は眞面目な顏をして、

『大塚は妾と喧嘩をするのは好いけれども、もう決して男同士の喧嘩はさせた

くない。大塚は婦人には負けてゐるが、男子に向つては決して負けないから、妾はいつも此の事で氣苦勞が堪えません。』

自分が感心して聞いてゐると、友人の大塚は日本語で、

『君、此女はね、僕の喧嘩振りに惚れたんだから、僕を非常に強い者だと思つてるよ、そして僕に大した腕力があると信じてるから可笑しい、腕力から云つたら嬶にだつて一ト捻りだ、ハハ、、、。』

自分も笑つた。妻君は日本語が分からぬから、我々の笑つたのを妙な顏をして見た。

『日本語を使ふと、妾は喧嘩をするよ。』

と大塚の腕を掴む。大塚は顏をしかめて、

『エクス、キユーズ、ミー、』

△米國の好男子

◎日本の所謂色男には金と力が無い。だが米國では其反對でなくては色男の資格に缺けて來る。

米國の好男子は先づ第一が體格が立派でなくてはならぬ。骨格、筋肉の發達が充分で、精悍な氣が滿ちてゐなくては駄目だ。業平流や丹次郎的では婦人の愛を買ひ難い。尤も容貌は清秀でなくてはならぬが、のつぺりした美しいのを喜こんで、所謂「人形食」といふのが多い日本婦人とは少し西洋婦人の見方は違つてゐるやうだ。けれども、また一致した所もある。それは『苦味走つてる』と

か、『凛々しい』とか云ふことは東西共に婦人の喜ぶ男性の形である。米國の好男子は青髯の跡があざやかで、目鼻立が明瞭して、勇氣に富んだ、ずつかりした好丈夫的な男子を好むやうである。此處も或る點まで日本と一致してるが、日本の在來の物語りなどの好男子が、多く丹次郎的であるのとは趣を異にしてる。歐米の劇で見る舞臺上の好男子の殆んど總てが、體軀の立派な男であるのに比して、日本のは弱々しい。婦人の見たる男子の好尚が稍々其撰を異にしてるのと見える。金錢に關しても、歐米は押しなべて、金錢を眼中に置いてゐる日本のは金錢を度外視して掛つてる。で、米國の好男子は、結局金力も無くてはならぬのだ。

米國で、最も普通社會に歡迎されてゐるものは『メロドラマ』だ。至る所の二流

以下の安芝居では此のメロドラマを演じてゐて、極く趣味の低い一種の社會劇が多大の勢力を占めてゐる。そして此の劇の主人公となるキャラクターには米國の理想的好男子が出て來る。此れが丁度日本の在來の劇中の好男子の役を引き立てゝ來る副主人公に相當する人物と殆んと同じ型の人格である。體格が立派で、義氣に富んで、金もあり、力もあり、戀に落ちた若い男女の難を見て、進んで此れを扶けやうといふ、例へば——少し例として候らぬが、權八小紫の長兵衛。東與五郎の長五郎、——それから小春治兵衛の太兵衛、梅川忠兵衛の八右衛門と云つたやうな敵役にでも廻りさうなのが(今少し好男子化せられて)好男子の株になつてゐる。是を直ちに日本の好男子に候めて來ると、少し色彩が強よ過ぎて、同情が少なくなる所がある。婦人に可愛がられる男が日本の好

男子だが、米國は婦人を愛するに足る男子が好男子だ。此所に一寸相違がある。何んでも米國は、たよりになりさうな男が流行るのと見える。

△滑稽に感じた米國婦人との談話

◎日本では婦人の方から男子に向つてプロポーズすることがあると、自分が云つた言葉を或る婦人は非常に驚いて、婦人の恥辱だ、と云つてゐた。

日本の男子は男子からプロポーズするよりは婦人からプロポーズされるのを寧ろ快と思ふ氣風がある。だから相愛中に間々男子は婦人のプロポーズを俟つてゐる形があるやうだ、と云ふと、米國の婦人は男子がプロポーズせぬ限り、決して婦人からはせぬと威張つてゐたが、自由結婚の本場だから、其樣大きな口

は利けまいと可笑しくなつた。

◎或る婦人は日本には身を賣つて亭主の糊口を助けると云ふが、實に恥辱極まる、と云つて奮慨してるから、自分は直ぐに、

『米國には自分から進んで姪賣婦になつて、自分の口を糊してゐるぢやないか。』

と云ふと、其婦人は忽ち赤い顏をした。

◎日本では生魚を食ふと云ふが、實に野蠻だと云つて笑つたから、

『米國では血の出るビーフステーキを食ひ、生牡蠣を食ふではないか、國風の相異を以て直ちに野蠻呼はりをするならば、何んでも持つて來い、一々說破してやる。』と云つて駁退してやつたのは痛快だつた。

△『助平』といふ字義の解釋

◎米國の下等社會の人間は日本人を『助平』と呼ぶ。彼等は『助平』といふ意味を好色といふことには解してゐないやうだ。單に日本人といふ語を卑俗的に云つたもので、米國人を『ヤンキー』と云ふのと同じ位に思つてるらしい。

が、『助平』と呼ばれて見ると、始めの中は有繋に快い心持はせぬ。

『何んだ、助平だ、汝こそ餘程助平だ、手前が助平だい。』

と云つてやると、彼等は驚いてゐる。

其所で、助平なる語の解釋をして、好色の意味を會得させ、さて、後、米國人が日本人より好色漢なる實例を列擧して彼等に服さしめ、一段調子をあげて、

『お前等が助平だ。』

と一喝すると、元來人の好い米國人だから、ニヤ〳〵笑つて引下つて了ふ。

◎米國人は婦人のスタッキング及び其スタッキングを結ぶリボンを肉慾的に大趣味を感じて非常に有難がる。そして緣起が好うがつてる。益々其助平的國民たるを證するわけだ。

◎米國の婦人の前で『地獄』だの『クスグル』だの『シボル』だの云ふ語を使用するのは大侮辱である。日本人は發音の惡るい爲めに大失敗をして散々な目に逢ふことが屢々あるのは珍らしくないが、國風が違ふ爲めに、嬰兒の生れることや、乳が出ないことを婦人の前で話して注意されるなどは毎々のことだ。知つてゐて故更に面白い處まで切り込んで婦人に赤い顏をさせるのを喜んでゐ

る物數奇な日本人もある。

△米國人と火事

◎米國人は火事に騷がぬ國民だ。

日本――殊に江戸ッ兒は火事と云ふと直ぐにエキサイトして來る。ボヤがあつても、半鐘を入れて、火事だ、〳〵と夢中になる。

米國では火事だと云ふと、四頭立の馬が蒸氣喞筒を曳いて、眞慕に驅ける。鈴が鳴つて中々勇ましい。ヘルメット帽を冠つた消防夫が古代の勇士のやうな面構へで堂々として乘り出す。自動車の消火器が走る。それは中々立派で火消し側の出裝は目を驚かすばかりだが、市民は一向平氣で、知らぬ顔で職務を取つ

てゐる。外へ出て見やうとも殆んどしない。火事は何處だと尋ねもしない位である。

隣家がやけてゐても、窓から首を出して覗いてゐる。諸道具を取り方附ける樣子もない。其中火事は大概一二軒位で終る。

悠々として自己の職業に忠なるばかりで、何の粗忽から起つた火事なのかも知らぬ。

燒跡を訪ねて、ワイ〳〵云つてるやうな暇人もない。二三日して其所へ行つて見ると、もう家が建つて商賣をしてる。一體社會が多忙な故で他人の事項に顧慮する餘裕がないのである。日本なども漸次さうした狀態になる事であらう。

△米國人の飲料に對する嗜好

◎米國人は生水を平氣で飲む。生水は健康だと云つて、寧ろ迷信的に飲む。彼等は牛乳よりも新らしい生の水が有效だと心得てゐる。日本人が決して生水をのまぬといふことを不思議がつてる。

米國では貴婦人が波々注がれた杯の水を一ト氣息に仰ぎ飲んで、舌を皷して旨いと叫んでゐる。

パンと水と云ふことは人間が此の世に生活する意味だ。水とパンさへあれば生き得られる。水は生息の源だ。水の純なるものは生命だと思つてる。

黴菌を恐れて水を煮、或は漉して飲む人も多いが、一體に水を飲むといふことを恐れぬ。飲料水が精撰されて、水の爲めに害毒を蒙ることが少ない故であらうが、彼等は其平生の食料品が膏强く濃厚であるからして、自然に水を要求するのである。

一日三食、其都度水は第一に供せらるべきものだ。彼等は水を飲んで、そして食ふ。水は珈琲や、茶や、コ、アや其他の飲料物の一切のリクアー、レモネード、サイダーなど云ふ種類のものより全く獨立したものである。

米國人は日本人が生水を呑まぬ如くに、白湯は決してのまぬ。

◎彼等は氷をのむのを恐れぬ。生水の中に氷の小片を浮べて、水の極めて冷やかなるを酷愛する。寒中と雖も然りだ。米國では四時、二六時中『アイス、ツオーター』の必要がある。寒中アイスクリームを食ふ國民だ。以て如何に彼等

の體力が強いかゝ分るではないか。

◎米國人が普通に飲む酒類では麥酒は別として、ホキスキーが第一だ。

ホキスキーも、ライホキスキーよりは重にスカッチを好む。『スカッチハイボール』は一般米國人の嗜好に適してゐる。彼等は日本人が正宗の上燗を愛するが如く酷愛する。そして此れを男性的な、高尚で、意氣な飲物としてゐる。

婦人でも少し粹がつたのは此のハイボールをのむ。

ハイボールは讀んで字の如く、丈の高い杯で普通のコップの下部を細く上部へスッと少し開いた形のグラスである。此れに程好き形の氷の片を入れ、ホキスキーを注ぎ、後にヴシーでも、ホワキトロックでも、種々のシャスターを注ぎ、泡立つた處を、グッと一ト氣息に三分の二程飲み、暫らくして後を二タ氣息位

に飲み盡すもので、さうちび〳〵やる約束のものではない。

◎麥酒でも一杯は二タ氣息位に仰いで飲み盡すのが普通だ。一體にちび〳〵と杯の端をなめてるのは米國には流行らぬ。だから酒の趣味の解し方が日本人とは餘程違つて來る。左の手で、小ぽけな杯を上げて、屈んだなりにチビリ〳〵とやる所に日本酒の趣味はある。米國では立つてゐて、酒屋のカウンターにウエーター〕が乘せた杯を、伴があれば其男の手と自分の手と一緒に觸れると同時に杯を擧げ『グード、ラック』なり『ヒヤ、ゴース』なり簡單な『トースト』を云つて直ぐに一ト氣息に仰飲りつける瞬間に趣味があるのだ。飲料の味も其刹那の間に冷却しきつた流動體が唇と舌と頰の内側と喉とに觸れる刹那の間にあるのである。

併し酒屋でも、倶樂部でも、グリールルームで悠長に酒を飲んで長時間を費してるのもある。けれども、其等は特別の場合である。

倶樂部ではカルタや球突などを遊んで順々に酒を奢り合ふやうになつてるから、隨つて時間も長くなり、酒量も多くなるのである。

食事の前には、カクテルが普通である。カクテルにも種類があるが、ホキスキーの臺と、ヂンの臺とが異る丈けで他のミッキスされる藥酒は殆んど同じである。男の方へはオリブ、女にはチエリーと色を分けて一ト組みの男女の團欒にヅラリと杯を配るのは中々景氣の好いものだ。此等も一ト氣息にのむのが普通だ。

凡て此等の飲料は人々の嗜好で、年中麥酒ばかりの人もあり、麥酒の中でもス

チームビーアを好む人と、壜入りでも、ブルーリボンだとか、ゴールドメダルだとかに限られてる人もある。ホキスキーでも、スカッチの『ホワキト、エンド、ブラック』印に限られてるのもある。ライを好むのもありボーボンが好いといふのもある。萬人一樣でない。冬になると朝から『チーン、リキ』『ブランデー』と云つたやうな強いものを好む人もある。一體に強い酒を好んで、強い煙草をふかして、強いものを食つてゐる。活動が出來る筈だと思ふ。

三鞭は普通の場合に飲むものではない。何等か其所にコングラチユレートすべき事件が多少に拘はらず含まれてゐる時に限るものだ。併し或る人は飲物は三鞭に限ると、年百年中三鞭の上等を飲んでる向もあるやうだが、斯ういふのは稀だ。

食後婦人の一團は美々しく着飾つて、廣いピアザのパームの青葉の蔭で、ペパーミントのグラスにストローを衝つ込んで吸つてるのは好い形のものだ。どうしても此の邊の風情になると、日本のとは大分違つて來る。

◎好くない三鞭よりは好いポートワインが上品だ。葡萄酒の高價なのになれば際限のないものだ。三鞭は高いと云つて知れたものである。三鞭を金剛石とすれば、葡萄酒の方はルビーと云つた格だ。ルビーの高價なのになれば際限がない。

◎ポンチの中でも三鞭ポンチは上品だ。大きなカットグラスのボールに鹿の角の裝飾が付いて、其の中にオレンヂやレモンや胡瓜の皮やがあしらはれて、煌煌たる燭光の下に映じてるのは立派である。銀の大きなスプーンで酌んで、

周圍に盛裝した紳士淑女の戲れてる光景は全く文明的のやうに思はれる。そしてキャビアのサンドウキッチにスエズチーズなどが出てゐれば贅澤の頂上である。日本には此れと同じ樣なパーチーの凝つた行き方が一寸と無いやうである。ゴテ〳〵不味い御馳走澤山なのは、どうしても野蠻の風に近い。

チーズにクラッカーを塗つて食ふ味は歐米人の終生忘れられぬ味であらう。我が茶づけに香の物の味を忘れ得ぬ如くに。

日本人でチーズとトメトーの味に魅せられるやうになれば泰西化したのだと人が能くいふ。始めは嫌なものに思ふが次第に此の味が忘れられなくなつて來るのは長年外國に居た人の覺えてゐることである。

△米國婦人の內部に於ける權力

◎歐米は一般を通じて女尊男卑の國である。が分けて米國は女權の發達した國で、日に增し其の權力の伸長は著しくなつて行く樣だ。で日本人の眼から見ると、米國ほど婦人が男子に對して我儘の利く割の好い國はない樣に思つてゐる。そして米國の男子は凡べて鼻下の長い人間の樣に云ふけれ共、其れは表面に現はれた形式で、裏面の眞相は全く然うではない。

殆んど日本など丶同じ樣な形ちで、矢張り家庭に於ける夫妻の關係は、亭主は何所までも亭主だ。で、家長としての權威は充分に振はれてゐるのである。

日本などは形に現はれた女の勢力は甚だ微々たるものだが、其の代り內政に於

ての女の勢力と云ふものは、牢乎として拔くべからざるものがある。

一體東洋の習慣として、女流は內に引つ込んで家政の事を料理すべき筈になつてゐる。男子は家政一切を妻君に一任してゐる。既に家政の實權を男より委托されてゐる以上、女が其所に勢力を張ると云ふ事は當然である。家を守つてゐるのは東洋婦人の義務である、家庭に於ける勢力が婦人の手に掌握されるのは、り當然であらう。

然るに、米國の婦人は內政の凡べてに全く關係はると云ふ事が少ない。男子も又妻君に向つて內政の一切を委托せぬ。婦人は男子の繩張りである外部に向つて活動を試みようとする。社交の事に頭を出す。そして、男子と同等の權利を、外部に向つて振はうと務めてゐる。

一家の主婦が、其れ丈の事を爲ようと云ふには、止むなく家政を他の何者にか委托しなければならない。其所で家政の實權のある部分をハウスキーパーなどに委托して了ふ。經濟の凡べては、ハウスキーパーのブックに記入されてある。小供は、保姆に一切を任せてある。

既に米國の習慣として、或る一事を他人に委任した以上、委任者からの容喙を殆んど許さない事になつてゐる。其所で家政の實權のある部分は、ハウスキーパーなり保姆なりに移つて了ふ。主婦としての勢力が自然に稀薄になるのは、自然の勢ひである。

で、實際に米國の家庭へ入つて見ると、日本の家庭に於て、所謂『奥樣』が握つてゐる樣な大勢力はない。妻君は亭主の保護の下に立つて、そして、自己の實

權を他人に讓り渡してゐるのだから、中間で手を空しくして、立つてゐる樣な姿だ。實際に於ける妻としての米國婦人は、家庭に於ける貫目は日本の其れに比して輕からざるを得ない。

其れも妻君に特別の財産があるとか、特殊の伎倆があるとか云ふのならば、勢ひ亭主を尻を敢く的の行動もあるだらうが、これが妻の方に財産無しとあつて、伎倆なしとあつて、特殊の武器を具備してゐない以上、其所に何等の威張るべき材料が失くなつて了ふ。

米國の男子だと云つて、然う何所までも女に恐にはされてゐない。女房の弱點を掴んでゐる以上、其の威張り加減は日本と同じ事だ。日本よりもより以上烈しいと思ふ樣な態度が屢々ある樣に思ふ。

斯うなつてくると、隨分氣の毒なもので、日本の婦人が良人に對するよりも、より以上服從の度を勉めてゐるのである。亭主の機嫌を取つてお世辭を云つて、假りにも男の愛を失ふまいと務めてゐる。誠に憫然に見る樣なのが少なくない。ところで、斯うなつてくると、日本も米國も殆んど同じ事である。大體の人情は、古今東西然う相違のあるべき筈のものではない。婦人が男子の保護の下に立つて服從の意を示すのは、何所も同じ事だ。財産家から女房を貰つて、尻の下に敷かれるのは、これ又世界を通じての現象である。

唯、其所に多年の習慣に由つて、著しい相違を示してゐるのは、米國で云ふと、男子の婦人に對する取扱ひが外部に於て非常に丁寧である。日本では其の反對を行つて、外部に於ては誠に不丁寧である。

外國の男子は公衆の前で甘んじて女房の靴の紐を結んでやる。婦人は平氣な顏をして、足を前に出して、良人の肩を杖にして、空嘯いてゐる。男はくの字形に身體を曲げて、一生懸命に結び上げの紐を締めてゐるなどは、吾人の眼から見ると餘り賞めた圖ではない樣だが、米國の男はこれ等の事に至つては尋常茶飯の事としてゐる。

そして、其れが國風であり習慣であるから、別に婦人を尊敬した事だとも思つてゐない。

日本人は、米國の男子、女の靴の紐を結ぶと云つて、これを大した鼻下長の樣に云ふけれ共、實は何でもない事で、強いて譯を云へば婦人の靴の紐が解けて、其れを結び直そうとした所で、米國婦人の服裝は、屈むには都合の惡るい

様に出來てゐる。コーセットをきちつと胸から下腹へ掛けて締めつけて、上へ食ひ付いた上衣を着、ボタンをかけ、頭には時とすると、流行とあるから、日傘大の鍔廣の帽を被つて、花やリボンを房々つけてゐる。それで何うして靴の紐が結べよう。着物が皺苦茶になつて、亭主は却つて損害を受ける事になる。實は、斯う云ふやうな事で靴の紐も結んでやるのである。唯、これを見て直ちに男子の惚い證據にするのは皮相の見も甚だしい。

要するに米國の婦人は外部に勢力を張つてゐる。かはりに内部がお留守になつてゐる。日本婦人は内部に立派な根據地を作つて、其れを一生懸命に守つてゐる。だから米國婦人の慰藉は内よりも外にある。日本婦人は無論外よりも内である。唯其内外所を異にし、パブリック、とプライベートとの差ある丈けの

ことで、別に大した婦人の特權を天が依估贔屓して與へては居ない。此の消息は米國人の家庭へ這入つて見ると、殊に能く分るのである。日本婦人の中には内で得た特權は自己の獨占物として置いて、更に外部に向つても勢力を張らうなどゝいふ考へを持つて居るのもあるやうだが、さう人間の勢力が續く譯のものでもない。天は二物を與へずで、既に其國體によつて、しかあるべく約束づけられた日本婦人の内部の勢力を先づ固守して行くのが安全であらうと思ふ泰西の婦人が兩天秤を掛けて活動してるやうに見えるのは、それは間違ひである。何處の國の女流でも外部に勢力を振はうとするものは、全然内政のことを拋つてやつて、それでもまだ力が足りぬ位である。二兎を追ふのは策の得たるものではあるまい。

天幕生活

△危險は豫想を外れる

在米七年間、隨分種々なことをやつた。

自分は日本に居た時、日常の生活が餘り單調で、同じ軌道をぐる〳〵廻つて居るのがつく〴〵嫌になつた。

で、何か斯う身に染々と辛らい悲しい想をするやうな目に逢つて、心底から泣いて見たい、といふ氣に不圖なつたのである、

と、云つて自分は何にも左樣大膽不敵な男じやない。危險を冒すのを飯より好

きだと云ふ側の男ではない。何方かと云へば、のんべんだらりと暮らして、マア大平無事で其日〳〵を送つて居るのも滿更惡るくはない性なのだ。

だが、斯ういふ人間が、また如何かすると却つて辛らい思をして泣いて見たいと云ふ氣になるものだ。云はゞ氣まぐれなのだらう。

元來、辛らい目に逢つて泣きたいと云ふのが目的で米國に行つたのだ。

が、愈々其舞臺へ足を踏み込んで見ると、さう〳〵辛らい悲しいことだらけでもないものだ。今度こそ一つ冒險的な旅行を試みて、嫌と云ふ程苦勞をして見やうと、例の乞食旅行の『飛び乘り』などをやつて見ると、それが案外お手輕に行く。鬼のやうだと思つて居る車掌の奴等と馴染になつて、結句面白いやうな旅をする。

雪の落機山頭を中途で夜汽車を降りた。知らぬ町へ這り込む中に何か奇拔なことがあるかと内々短銃などを携へて行つて見ると、ロックスプリングの炭鑛夫に道で逢つてホキスキーの御馳走になつた。おまけに小遣まで心附けて貰つたりしたことがある。

と云つて、また頗る愉快で呑氣だらうと、内々乘氣で快遊船などに乘り組んで見た。船は大嫌ひたが、此れが紐育灣の近海、荒れた所で直ぐ何處の港へでも着くだらうなどゝ多寡をくゝつてると、案外酷い目にあつて一日吐き通しで職務の料理も給仕も出來ればこそ、死人同樣になつて船長から襟首をつかみ出され、おまけに月給も貰はずに首になるなどいふ意外なことがある。

要するに、旅行中に困難の湧いて來ることは全く豫想の出來るものでない。だ

から冒險のつもりで行つて、一向其れ丈けの成績を擧げずにおヂャンになることと屢々であつたが、遊散の積りで行た僕の『天幕生活』中に一度非常に危險な事に出逢はした。

恐らく僕の滯米七年間中、生命に係はる程の大事と云つては、唯此れ一つだらう、惡るく行くと異鄉の土になる所だつた。幸に今斯うして其當時を追憶してペンを走らせてるのは全く僕の幸運だつたのだ。が能く考へて見ると、――一層其の當時其れ切りになつて居た方が好かつたかも知れない。

△金錢の掛らぬキャンピング生活

千九百〇五年の夏だつた。

丁度自分は其の頃中米のインデヤナ州に居た。首都のイデアナポリスから數哩隔た郊外にリヴアザイド公園といふのがある。此れが夏になると遊散場になるのだ。丁度淺草公園を今少し、ハイカラにしたやうなものが出來る。

四方は茫々漠々たる大平野だ。所々に小高い丘や森やが昔の姿の儘で殘つてるし、平地は鋤鍬もまだ這入らず雜草が人の丈けより高く生へ茂つてる。

其の中をインデアナポリスの都――人口二十萬位、市俄古から汽車で五時間掛る――から二條の電車線路が通つて、それで此の公園へ往來するのだ。

公園はホワヰト、リヴアといふ可也大きい河の河畔にあるのだ。納涼場としては好位置だから、人出は實に夥多しい。

此の公園の夏場を見込んで自分等三人の學生は『ジャパニース、ボーリング、ゲ

ーム』といふ投球遊びの店を出した。三人とも學生だ。兩人はボデユーカレヂに機械學を專攻してる。自分は州立大學の方に居た。三人とも暑中休暇になつたから、次のタームの學資を作らうと云ふので始めた仕事だ。が、自分は手傳半分で進藤生と丸屋生と兩人が萬事を繰り廻して居た。

始めはインデアナポリス市から通つてゐたが、何しろ朝は早し、夜は十二時過ぎになるので不便なこと夥多しい。其所で三人でホワイトリヴアの河畔に『キャンピング、ライフ』をすると云ふことにした。

土地の者で隨分此の河畔に天幕生活をやつてるものがある。が、何れも公園に近い河畔の開けた場所を撰んで其所に立派な天幕を張り、贅澤な避暑をやつてるのだ。併し自分等は斯んな連中と一緒に取り組む譯に一寸と行かない。

此の邊に天幕を張るとすると、大分高い借地料を取られるし、交際費が素的に掛るし、それから日本流の亂暴な生活を一寸とやり難くつて、始終氣乘ねをして居なくてはならん。それに男三人だから、此の中へ若い女などが遊びにでもやつて來ると、自然我々の感情を刺激して神經過敏になつたりせぬとも限らず隨つて職務の方に影響を及ぼすから、何んでも、ずつと此の界隈を離れた上手の河岸を撰ぶに如くはない。無論借地代も出さず、公然的秘密に天幕を張つて其所で何んでも印度人的生活を此の一ト夏は送らうといふことになつたのだ。

△天幕敷地の撰定

一層人間を離れるなら、ウンと遠くへ行けといふので、或日丸屋一人を玉屋の

店番にして、自分と進藤と兩人は天幕敷地の撰定に出掛けた。

時は六月の下旬のことだ。店は非常に多忙くなつて來た。だから此の三四日以前から玉屋の方には兩人の白人の娘を玉番として安い月給で傭い入れた。

一寸と此所で無駄を少し云ふ。此の兩人の娘は我々の玉屋から出した玉番傭入れの新聞廣告に應募して掛合ひに來た十二三人の娘共の中から我々が撰定したので、兩人とも中々の別嬪だ。

一人は土地のもので名はマガレット。ハイスクールの學生だが、貧乏人の娘だから、此の暑中を働いて家計をヘルプするのださうだ。敎育もあり、縹緻も好し、玉番などには惜しい代物だ。本人は此の仕事は容易で、月給も割合に好いといふ所で望んで來てる。

今一人は市俄古生れだ。所々を渡つて來た莫連者らしいが、それでも日見えに來た時は、中々温順しかつた。キビ〳〵した性の女で二十三四で、藝人風の肌だ。何處かの安芝居へ一年程出て居たなどと話してゐた。名はメーブルと云ふのだ。

此の兩女を丸屋の手傳にして我々は上流へ出掛けた。

何處の河でも河上へ登れば登る程景色は好くなる。此所も左樣で一哩程來るとそれは實に素張らしく好い。

兩岸は楢、樅、護謨樹、綿の木などの大木が思ふ儘に枝葉を茂らして居る。其の下陰は野薔薇や蔓草が深く生ひ繁つて、古から誰もまだ此の邊に足跡を印したことはないやうである。

進藤と自分とは此處か、彼所かと頻りに場所を撰んだが、どうもイザ決めるとなると中々氣移りがして容易に話が纏まらぬ。

すると、進藤は一人自分と離れて上手の方へづん〳〵行つた。向ふで、オーイオーイと呼んでるから、其の方へ行くと、一ト本の大木の下に立つてゐて手招ぎをしてる。

行つて見ると、進藤は其の老木を仰いで、

『君、此の木の下にしやうぢやないか。』

と、云ふ。自然に土地が豁けて一寸と好い所だ。

『好いね、此所にしやう、だが、斯んな大木の下は少々危險だなア、落雷でもすると大變だぜ。』と云ふと、

『だから、此所が好いのだよ、君は此の木を何の木だか知るまい。』

自分は空を仰いだ。そして其の木振りを見たが、一寸と楓樹に似てゐて非なるもので、喬木としては實に立派な姿のものだ。

『此の木はねえ、君、シカモアの樹だ。此の木は雷避になるさうだ。何かの書物で僕は讀んだことがある。』

『さうか、ちやァ丁度好い、此所と決定やう、此の樹を目標にして明日愈々天幕を張ることにするか。』

『好からう、明日は三人掛りで大仕事をやらかさう。』

と云ふので、其日は歸つて來た。

△天幕張りの仕度

翌日は店を女共に一切任せて、我々三人は公園内にある、ボートハウスから一艘の丸木舟を借りた。それは天幕、柱、一寸とした世帶道具、本製の疊み寢臺毛布、ギヤスリンストーブ、米、鑵詰め、などを積み込み、それから鶴嘴、シヤブル、鋸、釘、などを買つた。玉場の賞品用に出す日本製の莫蓙にぐる〳〵卷いて、餘り人目に付かぬやう、こつそりと漕ぎ出した。

この獨木舟といふボートは元と印度人の發明した獨木舟だが、その型を其儘、今の進歩した造船法を用ひ、好く輕便に出來たものだ。一挺の短かい櫂を兩手で握つて、船端の左右を漕いで舵を取りながら船を進行させる。最初は一寸と

容子が分らぬが直ぐ上手になるので、我々三人共可也は漕ぐことが出來る。進藤と丸屋とが前後で二挺で漕いでるから中々船脚が早い。自分は眞中で天幕を太針で縫ひ合せて居る。

進藤は「ハイアワサ」の歌を妙な節をつけて歌ふ。それを、丸屋が頻りに冷評してゐる。丸屋と進藤とは餘り仲が好過ぎて、いつも喧嘩ばかりしてる。自分は兩人から多少畏敬されてるから、喧嘩をすると何時も仲裁の役になる。

シカモアの樹が向ふに見える。青々した空へ、迫らぬ態度でヌーッと擢んでゝゐる姿が誠に立派である。

我々は直ぐに岸へ船をつけた。それから一と氣息いれて愈々天幕を張るべく働き出した。

△輕便な我等の新家庭

公園近くの河岸に張つた白人等の天幕は中々贅澤なものだ。公園内の電氣、瓦斯を引いて臺所で好きな料理をするといふ風だから、天幕の張り工合もカテージ型だの何のと種々凝つてゐる。我々のは我流の輕便一方、膝さへ這入れば好いの流義だから譯は無いやうなものゝ、どうして中々手間が掛る。

自分は大鎌で四方のブッセズを切り開く。丸屋はシャブルで孔を掘る。進藤は柱を中央に立てると云ふやうに汗水を流し、人が居ないから素ッ裸體で、だくだく汗が出ると、河へ飛び込んで來ては働く。朝の七時頃から十二時過ぎまでには大略出來上つた。

中央に一本の大きな柱を建てゝ、その頂天から天幕を圓錐形に張り下げ裾は二尺置き位いに抗を打つて、それに結びつけ、南へ向いた一方を入口にして斜に日本製の花模樣の莫産を垂れた所は一寸とした思ひ附きだが、何んだか非人小屋じみるといふ評だつた。

三方へ別けて木製の極く簡單な壁み寢臺を置き、中央へは掘つ建の抗を四本、これが脚になつて、上へ三枚の粗板を正方形にして張り、上へ新聞紙を敷いたのが机である。

書物は瀬戸物の這入つてゐた大箱を縱に据えた。室内といふは此れ切りだ。

シカモア樹の根方へ持つて行つて矢張り此の大箱を据え、上にギャスリンストーブを乗せた。湯沸かしや、フライパンやなどは幹から幹へ打ち附けた横木へ

釘を打つて、それに掛けるやうにしたが、體裁が何んだか場末のセコンドハンドの店先のやうだと云ふ評であつた。珈琲茶椀や皿などは箱の中へ入れることにした。

シカモアの根方を圍つて小さな清流がチョロ〳〵と大川へ流れ込むやうになつてる。其所を堰き止めて井戸のやうにした。

夕方までに殆んど全く凡てが出來上つた。今夜から我々は此の天幕に夢を結ぶのである。

斯う思ふと非常に愉快だ。自分等で場所を撰定し、自分等で天幕を張り、自分等で臥床を作り、自分等で日本流の米の飯を炊いて食はうと云ふのだ。今日から米の飯がウンと食へると思ふと、嬉しくてたまらぬ。珈琲よりは茶が好い、

と云ふので早速茶を入れてのむ、と水が好いのだらう、どろりと濃く茶が出て旨いこと夥多しい。

インデアナ州には日本人が我々三人の他に二三人居る位いだ、だから、日本の食料品などはとても得られない。でも何處の國でも食鹽と野菜はある。一つ漬け物をこしらへやうなどゝ進藤は云つてる。糠があると糠味噌漬が旨いなどゝ丸屋は云つてゐた。

△夜の天幕

夕方キャヌーで公園へ歸つた。店番の女共は我々が今日何をしてゐたかといふことは知らない。三人は學生で、商賣一方の人間でないから、遊びたい時は商

賣をそちのけにしても呑氣に遊びに出掛けるのだ、と思つてる。我々はホワキトリヴア上流探險に出掛け、十哩程遡つて大きな鰐魚に出逢はし、既に一口に呑まれる處を逃げて歸つたと話した。女共はホワキトリヴアにも鰐魚が居るだらうか、手捕にして公園で見世物にしたら、屹度當てるだらう、などゝ騷いだ。

此の日は我々が留守だつたから夜の十二時迄店を張つて、平生の半分しか上り高がなかつた。

其晩は三人が食糧を大分用意し、キャヌーに積み込んだ。キャヌーは借りてゐるのだから、安物の賣物が出てゐるから明日はそれを買ふことにして、其晩は矢張り借り舟で漕ぎ出した。

船頭の方へ提灯を置いて自分と進藤とが漕いだ。丸屋は疲れ切つて横木へもたれて眠り出した。

月夜で風がある。右手の岸は白人の天幕でチラ〳〵火が見える。まだ流れに女づれのキャヌーが五六艘遊んでゐる。女の歌が聞える。ギターや、マンドリンなどを彈いてゐるのも聞える。

右手の岸はダンシングホールが建つて居て、ピアノの音が水に響いて來る。まだ踊つてるのと見える。

公園の方を振り向くと、まだイルミネーションが煌々と點いてる。何んだか迷はされたやうな氣になる。上流の方を見ると、川水が暗く、遠く、何處まで行つたら我々の「シカモア」の天幕に着くだろうと心細い程悠久たる流れをなし

てゐる。

我々は威勢よく漕いだ。暫らくすると天幕が白く見える。此れが我々のホームだと思ふと懐かしい。

『オイ、丸屋、着いたよ。』

丸屋は欠呻をして目を覺ました。

『すつかり疲れ込んでしまつた。』

と云つて、天幕に月が射してるのを見て、

『あれが我々の宮殿か、まるで物語りのやうだ。』

我々は岸に上り、船をつないだ。ラムプをつけて机の上に置いた。何んだか居心地が惡るくなさゝうだ。寢臺の上には白や赤の毛布が丸く卷いて乘つてる。

ギャスリンストーブでまた茶を煮た。麥酒を持て來たから、ハムで一杯のむ。丸屋は强いので、スカッチホヰスキーの壜を出して來る。進藤はキャンデーでのむのが好きだ。自分一人でハムは平げる。皆が醉つた。寢臺へ一人〳〵引き取つた。

シカモアの樹に風が鳴つてる。土の臭氣がして、野氣がひや〳〵肌に觸れる。丸屋はもう鼾聲をはじめた。

△想像では分らぬ

散々苦勞をしたい積りで太平洋を乘り切つて北米の地を行吟つた上句、日本人は殆んどゐない此のインデアナへ來て、斯うして我々は大河の岸に天幕生活

を始めた。

可也異樣な感がする。色々現在の境涯について感懷が起る。同時に將來を想ふまた故國のことも偲ばれる。時には情けないやうな氣にもなる。けれども愉快な時の方が多い。

だから一寸と考へると、斯んな生活をしてゐることを日本の友人にでも報告すれば、屹度いろ〳〵な想像をめぐらして、冒險的なライフを送つてると思ふだらう。

だが實際は極〳〵平和なもので、山犬一つ出ては來ない。時々三四尺位な蛇が天幕の裾を這つてる位のことだ。それも毒蛇でないから、摘んで河へ投げると巧みに泳いで何處かへ行つてしまふ。昼は公園へ出掛けて、大乘の遊散の人々

を相手に洒落ばしりで商賣をしてる。

此れ丈けだと、何にも此うして紙とインキを費す丈けの價値もない。が、危險は意外の邊より起つて來るものだ。

△雨中の天幕生活

自分等が河上に天幕生活をしてゐる、といふことは、店の女共も知らぬ。軒并の氷屋や覗銀鏡屋の男等も知らぬ。矢張りインデアナポリスから通つてることゝ思つてる。

我々は中古のキャヌーを十八弗で買つた。新らしい櫂も二挺買つた。天幕の內外も餘程小奇麗になつた。其所で店の女共丈けに、實は河上で天幕生活をして

るのだ、と云ふことを打ち明けると、女共は是非遊びに行きたいと云ふのだ。

で、我々は折々早仕舞ひをして女二人をキャヌーへ乘せて、——少し人數澤山で小さな船では持てあます——二挺で漕いで歸り、夜更けまでカルタなどをして遊んで、終ひ電車に間に合ふ樣送つて歸すことも度々ある。だから我々の天幕生活といふのが自然に評判になつた。

其所で、わざ〳〵白人の天幕から大衆で遊びに來る。我々も遊びに行く。急に交際費が張つて來るが仕方がない。どうで金儲一方でやつてる仕事ではないから、手一杯に上れば好いと、可也遊ぶ方に身が入る。

斯ういふ風で半月ばかり經つた。店の景氣も益々好かつたが、餘り天氣が續いた故か、とう〳〵本降りの雨になつた。今日で二日を降り續けてる。

遊散場に雨は大敵である。公園は火の消えたやうだ。イルミチーションもお廢止となつた、氷屋は戸を閉ぢてしまつた。我々の玉屋も御多分には洩れない。雨は矢張り止まぬ。今日で五日目だが、晴れさうな顏もして居らぬ。河水は濁つて水嵩はドン〳〵増して來る。天幕は水が漏り出す。土間は水が流れてる。寢臺はしめつぽくなつて、毛布が臭い。

シカモアの下の臺所も樣はない。飯だらけの鍋が土の上に拋り出されて、雨にたゝかれてる。うんざりして茶を沸す氣にもなれぬ。

濕氣拂ひだとつて、丸屋はホキスキーばかりあほつてる。進藤と自分とは麥酒だが、それも皆になつて、キャンデーを嚙りながら、寢臺へ仰向けになり、下らぬ赤本雜誌を讀んだりしてる。雨が漏つて來るのを、ソッと拭いて知らぬ顏

をしてゐる。成る可くなら我々の愛すべき此の天幕の爲めに不平じみたことを口にせぬやうと、いふのが云ひ合はせたやうに三人の胸にあるからだ。

『これもまた一興だ。』

とは何時も丸屋がホキスキーで醉つての云ひ草だ。

『雨の天幕も異だわい。』

は進藤のお定りの臺詞だ。

自分は元來士の上に寢たりすることは平氣な男だ。今日迄の米國生活で、大概斯んなことは卒業してる。だから他の二人の如く空元氣をつけて自己を欺く程に此の雨の天幕生活は厭はしく思はぬ。よし兩人が都のインデアナポリスの古巢へ引き上げても、自分一人は此所に晴れる迄は踏み止まつて居やう、と決心

してる。雨も風も左程に苦にはならぬ。斯ういふ事が酷く辛らく苦しく感ずる方であると、自分の目的の辛らい悲いし思をしたい、染々泣いて見たい、といふ注文に這入るのだが、どうも斯ういふ場合に出逢はすと、妙に平氣になるのが癖だ。

でも、矢張り晴々しい氣持ではない。自然に滅入り込んで來る。

『オイ、どうだ、今日は一つシチーへ出て見やうぢやないか。』

と丸屋が云ひ出した。

『此の雨ぢやあシチーへ出たつて仕方が無い、演劇でも開いてうやアだが、演劇も無しではつまらん。』と、進藤は云ふ。

『所がつまる事があるんだよ。

『僕は知つてる。丸屋君の非つまるといふ事を……。』

と自分が云ふと、

『ア、分つた、マガレットの所へ行かうと云ふのだ、ハハ、、、丸屋は相變らずスマートだ。』と進藤は叫んだ。

三人は思はず笑つた。其所で云ひ合せたやうに外出の仕度をする。

雨を冒してマガレットを尋ねると、同じ年頃の友達が兩人も遊びに來て居た所だ。我々は大歡迎をされた。夜更けまでカルタを遊んだり、樂器を玩弄にしたり、ワッ〳〵云つて騒いだ。戸外は土砂降りであることも氣が附かぬ程久し振りで心持能く遊んで、イザ歸らうと外へ出たのが彼是十一時である。

此の降りだから人通りは殆んどない。空明きの電車の、やつと一臺ヅヴアサイ

ド公園行きがあつたのに飛び乘つた。

コンダクターは我々を不思議さうな顔をして見た。此の降りにお前達はリヴァサイドに何しに行くんだ、と聞いた。眞逆か河畔の天幕へ歸るとも云へないから、少し急に要事があるんだ、とお茶を濁したが、人ッ子一人居さうもない雨の公園地へ急な要事も變だといふ顔附で、じろ〳〵見てゐた。

一體なら、今夜あたり天幕へ歸るのではない、丸屋は頻りと何處かへ一泊して夜が明けて歸らうと云つた。進藤も其氣になつたらしかつた。併し、自分は如何しても歸ると云ひ張つた。兩人の泊るのは勝手だが、自分丈けは歸る。斯ういふ晩に一人で天幕の中へ寢るのは、金殿玉樓へ泊るのよりも面白い、そんじよ其所等の如何はしいホテルは御免だと云ふので、如何しても歸幕を主張した。

自分は三人中の兄貴株だ。此れが云ひ張るのだから、二人は不本意ながら一緒に歸ることにした。

△土砂降りの河畔

停留所で電車を降りたが、實に驚いた。眞ッ暗闇だ。何處を如何行つて好いか更に分らぬ。だが平生から案内は知つた道である。左方へ取つてホワイトリヴアーの橋を渡り、向ふ河岸へ出て、舞踏室の横手からボートハウスへ行く迄は手探りでも行ける。ボートハウスまで行けばキャヌーに乘つて天幕までは譯が無い、サア、勇氣をつけて歩むべし、と自分は先に立つた。

△獨木舟で急流を遡る

橋へ掛ると橋畔の街燈がある。土砂降りの中を急ぎ足で來て見ると、河は大した水である。橋の上から覗き卸ろすと、恐しい勢だ。此間からの雨で水嵩が餘程增してゐる所へ、今夜の此の大降り、急にまた增水したのであらう、何んでも只ならぬ形勢だ。

『オイ、此の水ぢやア、とてもキャヌーでは駄目だ、危險だから止さう。』

と丸屋は立ちどまる。

『何アに此れしきの水が何んだ。』

と進藤は一言で云ひ消してしまつた。少し自暴氣味だ。カルタに散々負けたの

と、マガレットが丸屋の方へ餘計ちやほや云つた不平も交つてるらしい。進藤にしては思ひ切つた一言だ。

自分はサッサと歩いた。兩人も隨いて來た。ボートハウスへ降りて、置いてあるランタンに火を點けた。水勢は矢の如く流れてゐる。棧橋になつた所も水だ。其の他は暗くて凡て能く分らぬ。

『オイ、ボートを出したから君等先に乘れ。』

自分が聲を掛けた。すると丸屋はランタンを持つて立つたゐたが、

『君、此の水ぢやア實に危險だ、此れが君、河下へでも行くのならまだ好いが、此の流れを漕ぐつて亂暴だよ。』

『何アに、大丈夫だ、畫間だつて大したことはなかつたぢやないか。』

と自分は云つた。

『査問は下りだ、それに増水が非常だからとても駄目だ、僕はキャヌーには乗らない。』

『弱いことを云ふな、斯んな時に腕だめしをするんだ。愈々駄目なら岸へ附ける迄さ。』

『岸へ着けるつて、此の暗さに此の雨ぢやア。』

『ランタンがあるぢやないか。雨は大分止んで來た、サア、ぐづ〳〵せずと早く乗り玉へ。』

『僕は嫌、斯んな危險を冒してまで天幕へ歸らなきアならんことアない。進藤、君は如何思ふね。』

と、丸屋は進藤に加勢を求めた。

『僕は乗る。危險は危險だけれど、田村君(自分のこと)が乗ると云ふから我々も乗らう。一挺ぢやとても駄目だが、二挺なら大丈夫だ。君も乗れ。』

『僕はとても乗る勇氣はない、そして僕は游泳が君等程出來ない、もし引つくり返つたら其れ迄だ。』

『ぢやア、如何するね、丸屋。』

と自分は云つた。

『僕ア引つ歸へして向ふ岸から岸傳ひに歩いて歸る。』

『馬鹿な此の暗さに歩いて歸れるものか。』

『此のランタンを僕が持つて行く、君等は他のを持つて行つて呉れたまへ。』

『歩くつて君、道が分るまい。』

と進藤は心配さうに云つた。

『僕は二度歩いたことがあるから、ボツ〳〵歩げば危險はない。キヤヌーに乘るより此の方が安心だ。君等も一緒に歩いて歸らないか、惡るいことは云はないぜ、此の水に漕いで上るなアとても不可能だよ。』

と云つてる中に進藤はもう船へ移つた。同時に自分も乘つた。

船の中から、

『オイ、何方が先に天幕へ着くか競爭をやらう。』

と、進藤は元氣さうに云つて櫂を取つた。丸屋は何にも云はなかつた。

我々は他人の使用するランタンを一寸と無斷で拜借して船を出した。

自分は意地强く船を出したが、内心少々不安になつて來た。岸を見ると、丸屋のランタンの火が元來た道の方へ辿つて行く。

『君、隨分酷い水だぜ、大丈夫かねえ。』

と進藤は懸念さうに云ふ。

『是れで歩いて歸つちゃ、丸屋に合す顔が無いや、兎に角一生懸命で漕がう。』

岸を大分離れて漕ぎ出した。元來獨木舟といふ舟は船底の彎曲した丈の短かい船だから、覆沒の恐れは無いとして、流れを切つて進退を自由にするには隨分不適當な船である。右と左へ左右交る〳〵、兩手で持つた短かい櫂を漕いで、其の操り方一つで方向を定めるやうになつてゐる。波のない盆水なら誰でも譯はなく漕げるけれども、それにしても初心のものは船がくる〳〵廻つて一向前

進しないものだ。
進藤も自分も可成熟練者のつもりだつたが、此の勢の強い流に逆らつては、とても堪らない。船が岸をはなれると、もう大分押し流された。
『オイ、確乎しろ、流されるぞ。』
と自分は船首の方に居て櫂を操つた。
『君、危險だぜ、此の水ぢやア、とても駄目だ、今の中に止さうぢやないか。』
『弱い音を吐きたまふな。』
と云つたが、自分も、どうも薄氣味が惡るい。河も岸も一面只眞暗闇だ。何が河上から流れて來るか分らぬ。氣の故かしらぬが、大きな眞黑の家のやうな山のやうなものが、向ふから河一杯に流れて來るやうに見える。

『何んでも元氣一つだ、サア、漕いだ、確乎り。』
と岸近く水勢の弱さうな方をドン〳〵漕ぎ出したが二三町も進むと右側の岸の方に、(即ち我々の舸を出した處からは對岸に當る)一點の燈が見えた。
『オイ、火が見える、丸屋だらう。呼んで見やう、……オーイ、〳〵、〳〵。』
『オーイ、〳〵、〳〵。』
と向ふで答へるのがほんの微かに聞える。
『オーイ、どうした、オーイ。』
『オーイ。』
と云ふ聲が漸つと聞えるばかりだ。火は暫時〳〵動かぬ。
『君、向ふ河岸へ着けて、丸屋と一緒に歩るかうぢやないか。とても駄目だぜ、

まだ君二三町しか來ない、此れぢやア夜が明けたつて着きつこはないや、同じ所を押し流されたり、遡つたりしたつて駄目ぢやないか。僕アもう疲れ切つた。』

進藤は情けない聲で云ふ。全く進藤の云ふ通りだ。とても此の分ぢや、如何するわけにも行かぬ。向ふ河岸へ乘り切るさへもが困難だ。癇我慢も事に寄りけり、だと自分も我を折つた。

『ぢやア、左樣しやう。成可く押流されないやうにして向ふ河岸に着けやう、』

『オーイ、俟てやアーイ……。』

『オーイ、――。』

と向ふでは燈火がトットと前進しながら答へてゐる。

『チョッ、激い水だ、斯んなぢやないと思つた。』

自分は大に激して來た。其所で進藤を勵まして斜に流れを衝き切らうと一生懸命に漕いだが、其の骨の折れること、腕は棒になりさうだ。雨は矢張、降つてゐて身體中づぶ濡れなのは云ふ迄もない。汗だか膏だか、頭も顏もびつしよりだ。

『オイ、大分流されたよ。』

『仕方がない、何んでも好い、もう岸に着きさへすりやア。』

『丸屋の火も見えないや。』

『どうしたんだらう。』

『オーイ。』

何の答もない。多分樹の蔭になつたのだらうと思つたが心細くなつた。

△闇中燈火を失ふ

『ヤツ、火が消えた。』

と云ふ聲と同時に眞ッ暗になつてしまつた。我々の生命とたのむランタンの火は消えた。此の雨だ。雨が漏り込んで火が消えたのである。

『火を點けろ、マッチ、〳〵。』

丸屋は用意のマッチをポケットから探り出した。が駄目だ。擦つても〳〵火は出ぬ。マッチはずぶ濡れになつてると、丸屋は泣き聲を出した。

船はぐる〳〵廻り初めた。そしてドン〳〵流されてしまふ。サア・大變だ。

『オイ、進藤、素ッ裸體になれ、俺が漕ぎ止めるから。』

と云ふので、進藤を裸體にさせた。そして進藤に漕がせて、少しでも押し流されぬやうにしてゐる間を、自分も裸體になつた。眞逆の時は河に飛び込んで岸に泳ぎ着く積りだ。自分も進藤も游泳は可也達者である。

困るのは方角が分らぬ。押し流されながら下流の何處にでも船を着ける分には、如何でもならう。だが、そんな事をしてゐては何處まで流されるか知れぬ。

進藤は泣き聲を出して何んだか云つてるが、能く分らぬ。自分も狼狽へてしまつた。膝が震え出して來た。もう一層河へ飛び込んで泳がうと云ふ氣にもなる。それでも默つて、無暗と漕いでる。もう我々は日頃のキャヌーの熟練者などゝ自惚れてゐた人間では無い。

△唯一生懸命

何んだか知らぬが、ドーンと船に打ッ突つたものがある。アハヤと思ふと船は引つくり返つた。

自分は唯一生懸命に泳いだ。首を揚げて、オーイ、と云ふと、オーイ、と何處かで進藤が答へる。何んでも岸に泳ぎ着かねばならぬ。首を揚げて方角を考へながら泳いでると、すぐ近邊で進藤の聲が聞えた。

『オイ、岸へ着いたよ、オイ、此方だ、〳〵。』

『岸へ着いたッ？』

と聲のする方へ泳ぐと、成程木の根に手が當つたから。遮二無二しがみ附いた。

此の時の嬉しかつた事。我々は岸近くまで漕ぎ附けて居たのと見える。漸々岸へ這ひ上つたが、進藤も自分も水を少し飲んだばかりで大した疲勞も覺えぬ。何しろ生命拾ひをしたやうな氣で、寧ろ勇氣が出て來た。

だが此の儘では眞ッ暗で、とても天幕まで歸るわけに行かぬ。だとて此の儘此所へ夜明かしは猶出來ぬ。丸屋の火も、もう見えない。彼は今頃は天幕に着いて火を點して茶でも入れてることか、嗚呼、我々はとう〳〵失敗てしまつた。

進藤と兩人で岸を這ひ上つた。此の邊には白人の天幕がある筈、それを見附けて一夜を明かさう、と考へた。併し此の雨で彼等は天幕を畳んで、もう皆引上げてゐるのだ。とても一軒も殘つては居まい。

彼是してる中に雨が晴れた。少し明るくなつて來た。夜の明けるにはまだ早い

が、雲が切れて月でも出るのか知ら、と空を仰ぐと成程月だ。斷雲の小口へ薄つすらと月らしい光りが見て來て、四方は幾分か明るい。

『君、彼方に見るのは天幕のやうだぜ。』

闇を透して見ると、成程天幕らしい。素裸の儘で雜木林の中を荆に刺されながら這ふやうにして、其所へ辿りついたが、果して天幕である。白人の或る人が此所へ其儘取り殘して行つたのであらう。

此の中へ兩人はもぐり込んだ。泣きの涙で一夜を明かし、漸つと東の白む頃途を拾ふて我々の天幕に歸らうと、此の時はもう疲れ切つた身體を引きずつて起き上つた。

△無慘な親友の最後

半哩ばかり行くと、途の中途に掛けてある板橋が落ちてゐる。兩方の崖が崩れ。護謨樹が二本横倒しになつてる。

丸屋は如何して此所を渡つたらう、嘸ぞ難儀をしたことだらうと話しながら、崩れた崖を下へ自分は飛び下りると、實に驚いた。アッと云ふ聲を揚げて進藤を呼んだ。

『丸屋が死んでる。』

と叫んだ聲に進藤も飛び下りて來た。

丸屋は此の崖に落ちて無慘な最後を遂げて居る。サア、我々は如何して好いか

分らぬ。驚愕と恐怖とが一緒に我々を固くしてしまつた。

我々は丸屋を引き起したが、もう實に無慘な樣で死んでゐる。崖から落ちた時に下から突き出た鋭い石の角で頭腦を打ち碎いたのである。血は泥を染めて、草も水も眞紅になつてる。進藤も自分も慄へ上つた。

如何することも出來ぬ。我々は裸體の儘だ。一ト先づ天幕へ引つかへして、仕度をしてから兎も角もするより他はない。丸屋の死骸を擔いで天幕へ運ぶ勇氣はもうない。

我々は泣きながら天幕へ歸つた。

* * * * * *

それから丸屋の死屍を方附けて葬式をした。遺骸を國元の兩親に送り屆ける迄、

進藤と自分とは天幕に居た。

我々の天幕生活は實に悲慘な幕で閉ぢられてしまつた。

職業の方は雨で總て失敗、兄弟同樣の丸屋は死んでしまふ。進藤と自分は凡てを悲觀するやうになつた。それで學校も止めてしまひ、兩人は別れ〳〵になつて、進藤はケンタッキー州のルイスヴヰール市へ働きに行き、自分は紐育へ旅立つことにして、我々のスヰートホームであつた天幕は其儘に棄てゝ別れたことであつた。

簡單な家庭

（一）

インデアナ州の首府インデアナポリスから汽車で二三時間、其所にグリンキャツスルといふ小さな村落がある。

デポーといふメソヂスト派に屬した大學がある。（純然たる宗教學校ではない。）其爲に此のグリンキャツスルは維持されてゐる一つの學校町である。

グリンキャツスルは其の名の如く美しい町だ。春に掛つて來ると花と若葉で町一面が繪のやうになつてしまふ。米國の何れの田舍町も油繪的だが、此所はそ

の中でも美しい所だ。此の町の銀行頭取で、オーヘヤ氏といふのがある。銀行家とは云ひながら、片田舍の小銀行の頭取だから、大したことはない。行員だつて四五人程しかない。看板さへなければ、銀行とは思へない位、極くお手輕なものだ。

オーヘヤ氏といふのはアイリッシュだ。其父がインデアナに流れて來て、農業で一身代起した。子が九人ある中で、オーヘヤ氏は末子だから財産の分前も無論少ない。で、少年時代から農業に從事し、中年には非常な勞働をやり、自分一個で可也の財産を作つた。そして三十前後に牧畜業をやつたが、それが當つて身代は太つて來た。

それ以來、堅固一方の事業に手を出し、今では此のグリンキャツスル町の中で

は財産家の一人である。

デポー大學の直ぐ近所に粗燒きの赤煉瓦製の二階屋がブナの若葉隠れに美しく見える。煉瓦の合せ目がセメントの色白く鮮かに明瞭り出て、箱入りの菓子のやうな鹽梅だ。併し元來粗燒の安煉瓦だから其の繼合目が正確に出やう筈がない。で後で一種のペンキで以て條目を描いてあることが分る。

隨分建築の趣味としては卑しいことで相應に金のある人間が、住宅の一軒も建てやう、或は買ひ取らうといふのに、斯ういふ見え透く樣な外形ばかりを飾るといふは、日本人などにしては嫌なことだ。が其所は一向平氣なものだ。斯ういふ事を氣にする程頭のある主人ではない。至極呑氣な平凡な好人物、中年時代の激しい勞働も、其壯健な體格がさせたので、別に社會に意義のある生存をす

る必要を認めて戰つたのではないらしい。働いてる中に金が貯つて來て、今斯うして呑氣な生活をして居やうといふのだから、主人公がどうしても、悲劇的には出來て居らぬ。

四角な赤煉瓦の家は、前に廣い外廊がある。お定りの應接室、ドローイングルーム、ライブラリー、食堂、臺所、それに二階の三室が寢室になつてゐる。其の他に小さな三室が小供の勉强室だ。此れ丈けでは五人の家内に先づ相應だ。主人のオーヘア氏は五十五六、妻君がイングランド系の女で四十五六、此の女が中々の豪物だ。オーヘア氏が財産をこしらへたのも此の妻君の力であつたらうと思はれる。ブライトな髪の色、眼が小さく、丸く、妙に光を帶びてる。丸顔の素質こい容貌は、中々貧乏人で一生を暮らして終るといふ風でない。可也

肥えてるが肉付が引きしまつてる。

主人はデップリ肥えた、光りの薄い赤い目を持つた平凡な顔立だ。唯其肥大な所に貫目があると云へばそれ迄。

姉娘がパールといふのだ。此れが一寸と小説の材料にでも使へさうな女だ。中々美人だ。母似のブライトな髪が薄く、中央から兩方へ分けて、ぐる〳〵と粗雑にしてるやうだが、どうして左樣ではないので、酷く此の髪に苦勞をしてるのだ。神經質な狹い額、小さい尖つた鼻、小さい引きしまつた口、併し柔和な眼、丸い品やかな身體、要するに小作りな女で、年は二十三の、去年此所のデポー大學の文科を出て、それなり遊んでる、といふのに一寸と所以がある。

此のパール娘は、此れ程の別嬪だが、惜しい、誠に惜しいことだが、少し吃で

其の上可愛さうに此の人は跛であつた。

妹娘はメーブルといふ、十九だが柄が大きいから押し出しが能く、顔立ちなどは父にも母にも似ず、延りした顔だ。口の大きい、鼻筋の長い、(眼は細い方)髪が濃くて黑い方だ。性質はお轉婆だ。父の氣性の呑氣な所を受け、また母の人を馬鹿にも仕兼ねないやうな意地强い所も多少受けてる樣だ。と云つて、左樣明瞭した性癖を人に示してはゐない。能くある米國娘の型だ。姉さんよりは女ッ振りはずつと落ちる。

一寸と見た所は妹が姉であるやうだ。姉のパール娘は不具者だから、自然兩親の愛憐が深いのか、我儘をさせてある。だから自然親にも甘えて見やうといふ風がある。だから可愛らしい處が見える。メーブル娘はシャキ〳〵してゐて、

小憎い所がある。大學の理科で三年生である。

十一になるロバートといふ男の子がある。母に似て少し利潑過ぎる處がある。

大きい姉さんと似た顔をしてる。

傭人は黑奴の三十前後の婦と、それから大學の文科に通つてる日本人の學生が一人、此の學生は二十一だと云つてるが、實は二十六だ。名はベラボーと云ふのだ。隨分變な名前だが、米國人には別に可笑しくもないので、ベラボー〳〵と呼んでる。

大馬と小馬が二匹、馬車が一臺、其他は犬も猫も居ない。時々隣りの雞が戸迷をして來る位だ。

（二）

先づ斯う云つた家内である。

此れ丈けで、金錢があつて、交際が小ない。主人も妻君もメソヂスト派に屬した大の基督教徒だ。二人ながら酒は一滴も口にせぬ。主人が時々葉卷をふかしてゐて、妻君に叱られてる。狼狽て〻庭へ出てベラボー君と一緒になつて廐の前で馬鹿話をすることが好きだ。

『矢張り煙草丈けは此の年になつても止められないよ、若い時に喫んだのが習慣になつてるのだ。習慣は恐ろしいものだ。』

と感心したやうに云つて、

『お前も、今の中に止めた方が好いせ、さうしないと、今に俺のやうに細君に叱られるよ。』

『私の國ぢやア、亭主が女房に叱られるといふことはないです。』

『でもさ、細君が煙草の臭氣を嫌ひだつたら、どうするね、君の口が煙草臭いと細君が接吻を厭がるものね。』

『私の國ぢやア、接吻などはしませんや、だから其樣な恐れはない！』

『ホー、さうだつた、お前の國ぢや、接吻をしないつてね、可笑しい、で、それで男女の情合が映るだらうか？』

『どうですか、其れは問題、だが、愛情は接吻が本位ぢやないですからね。』

『ハハ、、、、でもね、接吻即ち愛情だね、俺は五十六になつても矢張り接吻

は好きぢや、だが煙草も好きだね、所で妻が煙草の臭氣を何より嫌いとある。其所で兩立しないんぢや。』

『御尤で……。』

『で、俺はつく〳〵今にして青年時代の惡習慣を後悔する。』

『成程。』

『獨り煙草に限らずだ。萬事斯う云つた調子だ、だから、お前も青年時代の惡習慣、酒をのむ、賭博をやる、それから女の後を追つかける、……など能くない、で此所は、その宗教のお力ぢや、神の御手にすがつて、惡習慣を矯めることだ。』

と云ひながら、煙草をポカ〳〵ふかす。

相變らず此の老爺面白いことを云つてる、宗教々々つて有難がつてるが、此の男に、どれ丈けの宗教心があるのか、其平凡な淺薄な頭で何が宗教が分るものだ。と日本の學生は馬鹿にしてる。

使つてる日本の學生にも、どうかすると馬鹿にされやうといふ主人だから、細君は些つとも亭主を恐れてゐない。だが其の尻の下に敷かうともしない。細君は利巧な顔をして、平凡な亭主へ丁度其平凡な型に嵌りさうな所を、仕向けて行つてる。

此れ丈けの男を、もう一ト事業上へ出て、大都會の大銀行の頭取になれと云ふやうな大望を吹き込みはしない。おだて上げて、力量以外の處へまでふら〳〵と資本をつぎこませるやうなことはしない。利巧な細君は巧みな鞭で亭主の猿

を踊らせてゐる。此所が餘程旨い所だ。

斯ういふ處から家庭が平和になる。此の細君は、まだ〳〵大身代の人の女房となる才幹も資格もある。けれども、此の亭主で滿足した。滿足は畢竟平和な家庭を作るのだ。

（三）

朝六時の眠覺まし時計がガチャ〳〵鳴る。例のベラボー先生眞黑な頭を擡げて延をしながら、寢臺の上へ胡座を組んで暫らくぼんやりしてる。

『えゝ、もう一時間程、眠たいなア、チョッ、十分ばかり御免を蒙らう。』

で、またごろりと横になり、シーツを引つかぶる。六時にば是非とも起きねば

ならぬ。此所で寐込む譯には行かないから、眼を塞いだ丈けで起きてゐる。暫時して細い目をあけて見ると、十分を過ぎて十五分だ。

ガバと跳ね起きて、靴を穿き、服をつけ、ソッと足音のしないやうに二階から降りる。

薄暗い廊下を通つて臺所に行き、戸を開ける。春の朝の空氣が寐惚けた顔へ冷やりと吹きつける。初めて眼がさめて、氣惰い身體がシャンとなる。

ベラボー君は臺所から後廊下をヒョコ〳〵歩るいて、太い鐵の鎖の附いた握手を摑まへて、グイと引くと、廊下の一方が三尺四方程開いて來る。下がベースメントで眞闇だ。

低い梯子段を拾つて下へ降りると、上から僅かに光りが射して、投げ出した大

きな斧の刃に鋭い色を着せる。それを取り上げて、滅多打に空箱を叩き割る。

一ト抱への焚附が出來た奴を、頸から掛けたエプロンに包んで、急いで立ち上る拍子に頭をコツン！

『God……痛！』

頭の瘤を撫でながら、青い顔をして出て來る。臺所の一方に据えつけたストーブの丸い蓋を二つX形のを一つ撥ね退けて、中へ新聞紙を一ト束ね、焚附を上へ添へて、蓋を掩ふと、直ぐに一方からマッチの火をつける。火は燃え附く。好い加減の所へ石炭を加へて、ホッと一ト氣息。

（四）

食卓の上にあつた鈴を取つて、ベラボー君は二階の梯子段の際に立つた。突然手荒らに鈴を五六遍打ち振る。

『オーラーイ』

眠むい聲、併し若い媚いた聲が二階の何處かでする。ベラボーは一寸と上の方を向いて、エヘンと咳拂ひをした。

其の足で有らゆる窓を開ける。各室が急に明るくなる。昨夜來客があつてケーキを食つた皿が其儘になつてる。『マン、オブ、アワー』といふ、小說が半分讀み掛けて投り出した儘になつてる。姉娘が小說好きで、斯樣な新刊物まで讀んでる。

ベラボー君は手賢こく四方を取り方附けて、臺所へ歸る。火が丁度好い鹽梅だ

少し薄ら寒いので手を翳ざして、嫌に太く荒れてる手の甲を恨めしさうに眺めてる。

其所へ輕い足音がして、すつと這入つて來たのは妹娘のメープルさんだ。

『グッド、モーニング、ベラボー』

『グード、モーニング、ミス、メープル。』

兩方で愛嬌笑ひをしてゐる。ベラボーは人の顏を見ると、直ぐに此の愛嬌笑ひをやる。米人の所謂東洋的微笑だ。日本人に馴れぬ米國婦人は、無暗と此の笑をあびせられて勃然になつて怒るのがある。

『お前、人の顏を見て何を笑ふんだい、失敬ぢやないか。』

『ハイ、……』

と云つて叱られて、矢張り笑つてる。

『何を笑ふんだつて云ふのに、……をかしな、氣味の惡るい男だねえ、何かわたしの顔に着いてるの？』

『否！　マダム』

と云つて矢張り笑つてるものだから、とう〳〵其れなり追ひ出されたといふ例は幾個もある。

だがメープル嬢などは能く此のベラボー君の平生を知つてるから、向ふでも微笑を以て受ける。臺所が急に活氣附いて來る。

メープルさんは淺黄色の極く簡單なシャツ一枚、腕をグイとまくり上げてる。腕にむく毛が大分長く生えて好い肉づきを猶能く見せる。頸筋が眞白だが、矢

張りむく毛だ。手束ねの髪が半ごわれで、丸くつぶした髷が波をうつたやうになり、干鰯の足のやうなものが、大分下つてるが、此れが矢張り、見馴れて來ると好い物だとベラボーは思つてるらしい。

短かい茶のカスカートの下から極く華奢なリボン附きのスリッパーが見える。尖の黑い艶へストーブの火先きがチラ〳〵映る。アイスボックスへ鷄卵を取りに行かうと、くるりと向ふをむくと、好い姿だ。丸い引きしまつた腰から尻がどうも美術品だとベラボーは文科の學生丈けに觀察が鋭い。

其の間にベラボーは馬に水をやりに行く。序に秣もやる。歸りに厩の側の籬根に咲いてる菫を一と束ね程摘んで、低い鼻をひこつかせながら臺所へ歸る。ベーコンを俎臺の上でスライスしてるメープル嬢の鼻の先きへ突然差しつける。

矢張り鼻をひこつかせてゐる。

『どうもチと此の鼻は高過ぎる、大きな鼻の孔だなア。』

と、ベラボーは鼻の孔を氣にして見てゐる。メーブル嬢は何にも云はずに一寸と笑ふ。ベラボーは例のオリエンタル、スマイルを惜しげもなくやる。そして一莖丈け花を拔き取つてお嬢さんの頭へ挿す。默つて挿させて居る。女の氣息が肉臭い匂ひをしてベラボーの丸い鼻の孔を襲ふ。

『西洋の女は是だから殺風景だ。朝起きても些つとも楊枝を使はない、肉食動物の癖に心掛けが惡るい、……其癖夜寐る前に悠々と楊枝を使つてることがある。日本などの女には無い事だ。』

と思ひながら、臭氣止めの積りで、花を鼻の孔へ挿し込むやうにして食堂へ走

る。そしてマンテルピースの上の硝子のヴェースへ花を盛る。

（五）

朝餐の卓が出來て一同食堂に集まつた。

食堂の壁には九谷燒の眞赤な金ピカの大皿を正面に額にして揭げてある。セントルイスの博覽會で大枚十弗出して買つたのださうだ。ベラボーは何時も此の額を仰いでニヤ〳〵笑つてる主人も妻君も娘も此の額が大自慢だ。ベラボーは斯んな皿は日本では五十仙位であると思つて、老爺奴お客にされたのだとをかしく思ふ。

朝餐が終ると、姉のパールさん、二階へ行く。可愛さうに好い姿だが跛だ。一

上一下といふ風に身體に波をうたせて歩る く。歩く時にカーペットが不調和な音をさせる。若い女の不具なのは實に氣の毒だ。とベラボーは茫然して見てるその見てるのを母親が見てる。

何んと思つて此の日本人は自分の娘の不具を見てるのだらうと思つてるらしいそして自分で悲しくなつて來たけれども、どうしよう譯にも行かぬから勇氣を出して、此れから洗濯をやらうと臺所へ行く。

妻君は洗濯に趣味を持つてる。凡ての米國婦人は洗濯をすることを、或る高尚な意味を含ませて此の勞働を味はう。洗濯の歌で好いのがある。それを口ずさむ。

バールが二階からベラボー、〳〵と呼んでる。

勢の好い聲で「イエース」と云つて二階へ駆け上る。少さな南向きの書齋の窓の下に大きな机を置いて、其處でバール嬢は陶器の畫を描いてる。

皿やコップの皆白なのが十個程積み重ねてある。それへ嬢はいろ〳〵な意匠を不器用な手つきをして描いてるのだが、左利きだから、その左の手に畫筆を持ち、口を歪めて細い線をかぢりつくやうにしてかいてる。

『また御勉強ですか。』

とベラボーは這入つて來る。

『手傳つてお呉れな。』

『オーライ！』

『此所へお掛けなさい。』

と急に丁寧な言葉で椅子を進める。

庭でラークが聲を張り上げてゐる。若葉の梢から眞すぐに雲に這入つて行くのをパール孃は茫然見てゐる。そしてパタリと畫筆を落として涙組んだ。

『如何したんです。何を考へてるんです。』

『あんなに愉快さうな鳥の生活が、わたしは羨やましい。』

『ぢや鳥になつたら如何です。』

斯う云つたが、返事がないから、筆の先で繪の具皿を掻廻して白い皿の面に、(Half in hope, and half in sorrow.) と書いて其縁を畫どつてゐる。

パールは一寸と此方を向いて、その句を見て下を向いた。

(六)

庭から妹のメープルが頻りにベラボーを呼んだ。

『默つてお出でな、ね、默つて……』

とパールは云ひながら、兩方を分けてしぼつたカーテンを窓に卸ろした。そして半分開けてあつた扉を、椅子から離れてしめる。

メープルの呼び聲が益々高い。癇高な聲を、長く引いて春の空氣にはしやいでゐる。

『また球投げをして遊ばうてんだ、お轉婆だなア、メープルは……』

とベラボーは獨語のやうに云ふ。

『貴郎、球投げよりか、此所で畫をかいてる方がよくなくつて？』

十位の女の子のやうな句調だと、ベラボーは思つてる。そして此れが少し吃のだから猶をかしい。西洋の女は二十二三になつても此れだ、此れで能く男子と同等の權利を得やうなんて大膽な氣が起せるものだ、と思つてる。

メーブルの呼聲が梯子段の下に聞えた。

『ベラボー』

『イエース』

とそれよりも高い聲で答へた。バールは、吃驚して飛び上つた。

突然ベラボーは扉を排して外へ出た。そしてメーブルと一緒に手を組み合つて庭へ出て、青芝の上で球投げをはじめた。弟のロバートも交つてワイ〳〵云つ

て騒いでる。庭からバールの畫室が見える。ベラボーは球を兩手で採むやうにして、不圖二階の方を見ると、バールが窓に倚つて、カーテンを半分程掲げて立つてる。ブライトな髪の毛と青白い顏色が、くつきりと若葉のてり返しを受けて、浮いたやうに見える。

『好い形だな。』

と思つて、球を投げずに、窓を凝視ると、バールは片手に皆白の皿を持つて、それを指し上げてゐた。そして、其の面には筆太に、

(Half in love,and half in sorrow.)

と書いてあつた。

『ハーフ、イン、ラーブ、……』

と口の中に云つて、茫然してゐる處へ、矢の樣に球が飛んで來た。受けやうとしたのを、受けはづして、ベラボーは左の眼の上へ球を受けた。強い痛を覺えて思はず涙が出る。兩手で眼を拭へると一緒に、

『Half in sorrow』とメーブルは叫んだ。

二階の窓には人影も無かつた。一週間程して多くの皿が竈から出されて、美しく着色されてゐた。其の中に文字を書いたのが一つあつた。それをバールは背齋に掲げた。

桃の實

（一）

確か千九百〇四年の夏だつたと記憶してゐる。自分は米大陸横斷の途次、カリホルニヤ州のローサンゼルス市を見物の爲めに下車した。一兩日滯在のつもりであつたが、此所で在留の同胞諸氏から少なからず歡迎された爲めに、つい二週間の餘を費した。

其の間自分は日の出旅館といふ日本人設立のホテルに宿泊してゐた。此のホテルの主人は日本人間中の有力者で、氣性も餘程面白い男であつた。自分が止宿

中は毎晩のやうに自分の部屋へやつて來た。そしていろ〳〵面白い話をして聞かせた。

何んでも米國には二十年近くも居るのだから、先づ此の邊では古參の組だ。だから其の經歷譚などは中々振つてゐた。

以下の話は、主人が身の上ばなしの一節である。

（二）

私は今でこそ、斯うして、日の出旅館の主人になつて、相當の地位もあり、また財産も多少出來て來て、土地の同胞社會からは、紳士だとか――餘り紳士面でもありませんが、――有志家だとか、惡口を云ふ奴共には古狸だの、何ん

だのと云はれる程の身分になつてゐるが、今から十年前の私と云つたら、それア實にお話にもならないやうな悲慘な境涯であつた。

私の米國生活の前半は總て失敗の歷史ばかりで、今思ひ出しても身慄ひをするやうだ。

私はメキシコに一年半位、或る勞働をやつた。此の間の悲慘な生活と云てはまるで獄卒同樣であつた。如何に忍耐を成功の楯と心得てゐた私も遂に耐えきれなくなつてしまつた。

或る晩傭主の目を忍んで、キャンプを脫走したのであつた。其途中思ひ掛けない災難に出逢して、多少あつた旅費から手荷物から、そつくり無くして了つた。生命から〳〵此のローサンゼルスに着いたのが、左樣、丁度今から十年前の獨